



宇宙法廷審理中

星野廉

目次

本書について	
本書について	2
テラ取り物語	
テラ取り物語—前編	14
テラ取り物語—後編	20
宇宙法廷審理中	
宇宙法廷審理中—第1話	36
宇宙法廷審理中—第2話	41
宇宙法廷審理中—第3話	46
宇宙法廷審理中—第4話	52
PDSジェネレーションズ	
PDSジェネレーションズ—XYZ	62
PDSジェネレーションズ—PDS	67
奥付	
奥付	76

本書について

本書について

本書は、とても長いエッセイ集『うつせみのあなたに』（全11巻）の副産物であり姉妹編です。副産物や姉妹編というのは、格好を付けた言い方です。焼き直しとか二番煎じとも言えるでしょう。

というわけで、本書に収められた『テラ取り物語』と『宇宙法廷審理中』には、『うつせみのあなたに』収録された一部の記事と重なる記述があります。重複する部分は、私が最も伝えたいメッセージが織り込まれた個所だと言えます。

<「何か」の代わりに「その何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。>

今挙げたフレーズは「代理の仕組み」と私が呼んでいる、シンプルな「理屈＝お話」です。シンプルでありながら、それをひとさまに説明しようとしてもなかなか伝わらない、ややこしい仕組みなのです。

『うつせみのあなたに』では、さまざまな素材を用いたり、いろいろな形式を借りて、「代理の仕組み」を説明しようと努めています。その一環として、生まれたのが、『テラ取り物語』と『宇宙法廷審理中』です。大人のためのおとぎ話、または風刺のきいた一種の文明論として、読んでいただければ幸いです。

一方、『PDSジェネレーションズ』は、SFタッチの未来小説です。人類が悪夢のような悲惨な体験をし、しぶとく生き延びたとしても、またもや同じような過ちを起こすだろうという視点で書いた作品です。しかし、それでも希望はあるという願いをラストに込めています。

希望——これを捨ててはいけませんよね。絶対に。

以下に、ブログ記事集である『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の全記事のタイトルを紹介します。収録されている記事は、小説だけでなく、哲学、文学、経済、時

事、言葉遊び、心理学、風刺、言語学、国語問題、表象文化論、文化人類学など、さまざまなテーマにわたります。本書をきっかけに、お読みいただければ幸いです。

*

第1巻

- 08.12.19 今日は誕生日
- 08.12.20 地図は現地ではない
- 08.12.21 消えてしまいたい指数
- 08.12.22 言葉に振りまわされる毎日
- 08.12.23 狂ったサル
- 08.12.24 あえて、その名は挙げない
- 08.12.25 遠い所、遠い国
- 08.12.26 横たわる漱石
- 08.12.27 信じてはいけない言葉
- 08.12.28 そして、話はお金に行き着く
- 08.12.29 匿名性の恐ろしさ
- 08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について
- 08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった
- 09.01.01 私家版『存在と無』一序文一
- 09.01.02 論理の鬼
- 09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について
- 09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球
- 09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性
- 09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない
- 09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考
- 09.01.08 見えないものを見る
- 09.01.09 読めないけど分かる言葉
- 09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉
- 09.01.11 目は差別する
- 09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？
- 09.01.13 架空書評：狂った砂時計
- 09.01.14 ん？
- 09.01.15 「ん」の不思議
- 09.01.16 あなたなら、どうしますか？
- 09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い
- 09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日
- 09.01.19 こんなことを書きました（その1）

第2巻

- 09.01.20 それは違うよ
- 09.01.21 ま～は、魔法の、ま～
- 09.01.22 なぜ、ケータイが
- 09.01.23 お口を空けて、あーん
- 09.01.24 冬のすずめ
- 09.01.25 架空書評：彼らのいる風景
- 09.01.26 交信欲＝口唇欲
- 09.01.27 ケータイ依存症と唇
- 09.01.28 オバマさんとノッチさん
- 09.01.29 もしかして、出来レース？
- 09.01.30 カジノ人間主義
- 09.01.31 コラブログとモノブログ
- 09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー
- 09.02.02 こんなことを書きました（その2）
- 09.02.03 1カ月早い、ひな祭り
- 09.02.04 神様になる方法
- 09.02.05 かつらはずれる
- 09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ
- 09.02.07 ひとかたならぬお世話になっております
- 09.02.08 架空書評：PDSジェネレーションズ
- 09.02.09 1人に2台のテレビ
- 09.02.10 人面管から人面壁へ
- 09.02.11 マトリックス
- 09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！
- 09.02.13 そっくり
- 09.02.14 「東京」E無限大
- 09.02.15 架空書評：九つの命
- 09.02.16 こんなことを書きました（その3）

第3巻

- 09.02.17 ああでもあり、こうでもある
- 09.02.18 差別化
- 09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい
- 09.02.20 まぼろし
- 09.02.21 トリトメのない話
- 09.02.22 架空書評：奪還

09.02.23 おいしくない社会
09.02.24 あきらめない
09.02.25 最後のとりでを守る
09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ
09.02.27 イエス・アイ・キャン
09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに
09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？
09.03.02 女か男か？
09.03.03 ヒトは本を読めない
09.03.04 作者はいない
09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって
09.03.06 毎度ありがとうございます
09.03.07 ゆうれいをはらう
09.03.08 こんなことを書きました（その4）
09.03.09 要するに、まなかな、なのだ
09.03.10 女心を男が歌う
09.03.10-09.03.12 でまかせしゅぎじっこうちゅう（前編）
09.03.13-09.03.15 でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）
09.03.16-09.03.25 うつせみのうつお
09.03.26-09.03.27 かわる（1）～（5）
09.03.28-09.03.29 かわる（6）～（10）
09.03.30 なる（1）～（3）
09.03.31 なる（4）～（6）
09.04.01 なる（7）～（8）
09.04.02 なる（9）～（10）
09.04.03 たとえる（1）～（2）
09.04.04 たとえる（3）～（4）
09.04.05 たとえる（5）～（6）
09.04.06 たとえる（7）
09.04.07 たとえる（8）
09.04.08 たとえる（9）
09.04.06-09.04.09 でまかせしゅぎじっこうちゅう
09.04.10-09.04.16 うつせみのうつお
09.04.17 たとえる（10）
09.04.18 こんなことを書きました（その5）

第4巻

09.04.19 平安時代のテープレコーダー
09.04.20 言葉を奪われる

- 09.04.21 「事実＝意見」＝両方ともでたため
09.04.22 「人間＝機械」説（1）
09.04.23 4月23日にギャグる
09.04.24 「人間＝機械」説（2）
09.04.25 「人間＝機械」説（3）
09.04.26 反「人間＝機械」説
09.04.27 あう（1）
09.04.28 あう（2）
09.04.29 あう（3）
09.04.30 あう（4）
09.05.01 あう（5）
09.05.02 あう（6）
09.05.03 あう（7）
09.05.04 こんなことを書きました（その6）
09.05.05 スポーツの信号学（1）
09.05.06 ドラマ信号論（1）
09.05.07 信号論から見た経済（1）
09.05.07 信号論から見た経済（2）
09.05.08 信号学的視線論（1）
09.05.09 信号学的視線論（2）
09.05.10 信号論（1）
09.05.11 もくじをつくりました
09.05.12 信号論（2）
09.05.12 信号論（3）
09.05.13 こんなことを書きました（その7）

第5巻

- 09.05.14 かく・かける（1）
09.05.15 かく・かける（2）
09.05.16 かく・かける（3）
09.05.16 かく・かける（4）
09.05.17 かく・かける（5）
09.05.18 かく・かける（6）
09.05.19 かく・かける（7）
09.05.19 かく・かける（8）
09.05.20 占い・占う
09.05.21 賭け・賭ける
09.05.22 書く・書ける（1）
09.05.22 書く・書ける（2）

- 09.05.23 こんなことを書きました（その 8）
09.05.24 と、いうわけです（1）
09.05.24 と、いうわけです（2）
09.05.25 あらわれる・あらわす（1）
09.05.26 あらわれる・あらわす（2）
09.05.27 あらわれる・あらわす（3）
09.05.28 あらわれる・あらわす（4）
09.05.29 あらわれる・あらわす（5）
09.05.30 あらわれる・あらわす（6）
09.05.31 あらわれる・あらわす（7）
09.06.01 あらわれる・あらわす（8）
09.06.02 こんなことを書きました（その 9）

第 6 卷

- 09.06.03 つくる（1）
09.06.04 つくる（2）
09.06.05 つくる（3）
09.06.06 つくる（4）
09.06.07 テリトリー（1）
09.06.08 テリトリー（2）
09.06.08 テリトリー（3）
09.06.09 テリトリー（4）
09.06.10 テリトリー（5）
09.06.11 テリトリー（6）
09.06.12 テリトリー（7）
09.06.13 こんなことを書きました（その 10）
09.06.18 なわ＝わな
09.06.19 台風と卵巣
09.06.20 出る
09.06.21 うんちと言葉
09.06.22 地と知と血（1）
09.06.22 地と知と血（2）
09.06.23 「あつい」と「わからない」
09.06.24 ぼーっとする、ゆえに我あり
09.06.25 時の神＝あわいわあい（1）
09.06.25 時の神＝あわいわあい（2）
09.06.26 こんなことを書きました（その 11）

第7巻

- 09.06.27 空前の「純文学」ブーム
- 09.06.28 「時間」と「とき」
- 09.06.29 「揺らぎ」と「変質」
- 09.06.30 不自由さ (1) 2010 年
- 09.06.30 不自由さ (2) 2010 年
- 09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)
- 09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)
- 09.07.02 うたう
- 09.07.03 まつはいつまでも、まつ
- 09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (1)
- 09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (2)
- 09.07.05 マンネリズム・マニエリスム
- 09.07.06 こんなことを書きました (その 12)
- 09.07.07 いみのいみ
- 09.07.08 何となく
- 09.07.14 記述=奇術=既述
- 09.07.15 3人のゲンちゃん
- 09.07.16 あつさのせい?
- 09.07.17 システムと有効性と比喻
- 09.08.01 気になるというか
- 09.08.02 もう1つ気になることが
- 09.08.03 さらに気になることが
- 09.08.04 できないのにできる
- 09.08.05 何もないところから
- 09.08.06 めちゃくちゃこじつけて
- 09.08.07 銃が悪いのではなく
- 09.08.08 どうにもならないときには
- 09.08.25 こんなことを書きました (その 13)

第8巻

- 09.08.11 たわむれる
- 09.08.12 なつかれる
- 09.08.13 げん・幻 -1-
- 09.08.14 げん・幻 -2-
- 09.08.15 げん・幻 -3-
- 09.08.16 げん・幻 -4-
- 09.08.17 げん・幻 -5-
- 09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-
09.08.20 げん・幻 -8-
09.08.21 げん・幻 -9-
09.08.22 げん・幻 -10-
09.08.30 こんなことを書きました（その 14）
09.08.23 げん・言 -1-
09.08.24 げん・言 -2-
09.08.26 げん・言 -3-
09.08.27 げん・言 -4-
09.08.28 げん・言 -5-
09.08.29 げん・言 -6-
09.08.31 げん・言 -7-
09.09.01 げん・言 -8-
09.09.XX げん・言 -9-
09.09.XX げん・言 -10-
09.09.XX げん・現 -1-
09.09.XX げん・現 -2-
09.09.XX げん・現 -3-
09.09.XX こんなことを書きました（その 15）
09.09.04-09.09.26 小品集（1）
09.09.27-09.10.23 小品集（2）
09.10.25-09.11.14 小品集（3）

第9巻

09.09.04 お墓参り
09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）
09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）
09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）
09.11.13 代理だけの世界（1）
09.11.14 代理だけの世界（2）
09.11.15 代理だけの世界（3）
09.11.19 代理だけの世界（4）
09.11.27 1年前の記事を読んで
09.11.28 今、考えていること
09.11.29 社会復帰はあきらめました
09.11.30 代理だけ
09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）
09.12.XX こんなことを書きました（その 16）
09.12.02 でまかせ・いず・む

- 09.12.03 もてあそばれるしかない
- 09.12.04 わかるはわかるか
- 09.12.05 翻訳の可能性と不可能性
- 09.12.06 わかるという枠
- 09.12.07 わかるはわからない
- 09.12.08 わかるはプロセス
- 09.12.09 3つの枠
- 09.12.10 ちょっとないんですけど
- 09.12.11 あなたとは違うんです
- 09.12.XX こんなことを書きました（その17）

第10巻

- 09.12.06 ヒトいろいろ
- 09.12.07 信号としての石川君
- 09.12.08 コトバとチカラ
- 09.12.09 ごめんなさい
- 09.12.10 政治とは「分ける」こと
- 09.12.11 きな臭い話
- 09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて
- 09.12.09 続・社会復帰はあきらめました
- 09.12.10 ブログと心中？
- 09.12.11 よくないなあ
- 09.12.12 素面でいたい
- 09.12.13 儀式
- 09.12.14 爪を切る
- 09.12.15 わける（1）
- 09.12.16 わける（2）
- 09.12.XX こんなことを書きました（その18）
- 09.12.16 二句
- 09.12.19 ずらす
- 09.12.20 かえるのではなくてかえる
- 09.12.21 とりとめもなく
- 09.12.22 パラレル
- 09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）
- 09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）
- 09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）
- 09.12.26 日本語にないものは日本にない？（4）
- 09.12.27 日本語にないものは日本にない？（5）
- 10.01.12 かえるはかえる

- 10.01.13 かえるにかえる
- 10.01.14 もどるにもどれない
- 10.01.15 け==く
- 10.01.16 まことにまこと
- 10.01.17 まことはまことか (前半)
- 10.01.17 まことはまことか (後半)
- 10.01.18 本物の偽物 (前半)
- 10.01.18 本物の偽物 (後半)
- 10.01.19 からから
- 10.01.20 2010 年 1 月 20 日にギャグる
- 10.01.21 こんなことを書きました (その 19)

第 1 1 卷

- 10.01.22 夢の素 (1)
- 10.01.23 夢の素 (2)
- 10.01.24 夢の素 (3)
- 10.01.24 夢の素 (4)
- 10.02.02 うつせみのたわごと -1-
- 10.02.02 うつせみのたわごと -2-
- 10.02.03 うつせみのたわごと -3-
- 10.02.04 うつせみのたわごと -4-
- 10.02.06 うつせみのたわごと -5-
- 10.02.07 うつせみのたわごと -6-
- 10.02.08 うつせみのたわごと -7-
- 10.02.09 うつせみのたわごと -8-
- 10.02.10 うつせみのたわごと -9-
- 10.02.11 うつせみのたわごと -10-
- 10.02.12 うつせみのたわごと -11-
- 10.02.13 うつせみのたわごと -12-
- 10.02.14 うつせみのたわごと -13-
- 10.02.15 うつせみのたわごと -14-
- 10.02.16 「外国語」で書くこと
- 10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える
- 10.02.19 動詞という名の名詞
- 10.02.21 名詞という名の動詞 (前半)
- 10.02.21 名詞という名の動詞 (後半)
- 10.02-25 不思議なこと
- 10.02.27 はかる -1-
- 10.02.28 はかる -2-

10.02.XX はかる -3-
10.02.XX はかる -4-
10.03.XX こんなことを書きました (その 20)
10.03.04 代理としての世界 -1-
10.03.05 代理としての世界 -2-
10.03.06 代理としての世界 -3-
10.03.07 代理としての世界 -4-
10.03.09 代理としての世界 -5-
10.03.11 代理としての世界 -6-
代理としての世界 (改訂版) (1)
代理としての世界 (改訂版) (2)
代理としての世界 (改訂版) (3)
代理としての世界 (改訂版) (4)

テラ取り物語

テラ取り物語——前編

大昔のことです。

尻尾のないおサルさんたちが、たくさん森に住んでいました。なぜ、森に住んでいるかという、手先がとても器用で、木登りや、木から木へと飛び移ったり、枝にへばりついた木の実を採ったりするのが得意だったからです。その手の器用さは、木登りが上手なクマさんやリスさんたちとは比べものにならないほど、すごいのです。尻尾のないおサルさんたちの中には、小枝や葉っぱを細工するものまでいました。

その尻尾のないおサルさんたちの中で、体毛が薄く、あんまりぱっとしない感じの種類のグループがいました。手先は抜群に器用なのですが、力がとても弱くて、おとなしく、またうじうじした性格なので、ほかの尻尾のないおサルさんたちや尻尾のあるおサルさんたちから、かなり馬鹿にされていました。

ところが、そのうだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんたちのグループに、変なことが起きました。森にある食べる物を取り合う競争にも負けて、グループのメンバーの数が減ってきたのですが、その残ったメンバーたちが、やたらずるいのです。それにすることなすことが、とっても変なのです。やることが変で、しかも、ずるいメンバーの血を引くものたちだけが残ってしまった。そんな感じです。

「ずるい」と「賢い」は似ています。「ずる賢い」なんていい言葉もありますね。どうして、そのうだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんたちを、このお話で「ずる賢い」と言っているのかと、不思議に思っている方もいらっしゃるに違いありません。

その理由は、さきほども少しお話ししましたように、このうだつの上がらない種類の尻尾のないおサルさんたちが、ちょっとというか、そうとう変だったからです。ほかの種類の尻尾のないおサルさんたちや、尻尾のあるおサルさんたちや、おサルさん以外の生き物たちに比べると、することなすことが、どう見ても変なのです。普通じゃないことばかりするのです。

ちなみに、なぜ、尻尾の「ある」と「ない」にこだわるのかというと、一般的に「ある」ほうより、「ない」ほうがずる賢いからです。体も大きいです。英語で尻尾の「ある」ほうをモンキー (= monkey)、「ない」ほうをエイプ (= ape) といって、区別するくらいです。たぶん、趣 (おもむき) が違うんですね。

*

さて、うだつの上がない種類の尻尾のないおサルさんたちの、変な行動の中でも一番変なのは、口の中で何やらモゴモゴやることです。木の実や草の実なんかを食べている音とは違うのです。

その変なモゴモゴを仲間同士でやり合って、森の中でのいろいろなルールに反することを始めました。前代未聞とか空前絶後というやつです。どうやら、モゴモゴは、仲間うちの合図のようなのです。その合図によって、かなり込み入った連絡も取れるみたいなのです。

モゴモゴによって連携プレーをして、ほかの生き物たちの食べ物を横取りする。もともと手がすごく器用ですから、連携プレーで、棒切れを使って、ほかの生き物たちをいじめたり、殺しちゃう。そのうち、石を使ったり、土や泥をこねて悪さをしたり、わざと森で火事を起すまでになりました。火は、ほかの生き物たちが最も苦手とするものでした。つまり、怖いのです。

どうやら、うだつの上がない尻尾のないおサルさんは、その火を手なづけ始めたようなのです。そうそう、一つ忘れてはならない、大切なことがあります。モゴモゴをするようになってから、このグループのおサルさんたちの外見に大きな変化があらわれました。どういうわけか、恥しがり屋さんになっちゃったんです。

もともとが、このグループのおサルさんたちは、体毛が濃いほうではありませんでした。ほかの尻尾のないおサルさんと並ぶと見劣りがする。ぱっとしない。ひ弱で華奢。そんな感じだったからか、どうかは分かりませんが、モゴモゴが始まったころから、体、特に腰の辺りを覆い隠すようになったのです。

これも、森の重大なルール違反の一つです。木の葉や、枯れ草をつなぎ合わせたり、半

端じゃなく器用な手先を利用して草木の茎なんかを編み、腰みのみみたいなもので腰を中心に覆う。これは目立ちますよ。怪しまれないようにわざとサングラスをして、かえって目立つようなものです。

その腰みのを着けるようになったのと同時に、もう一つ大きなルール違反が起こりました。このグループのおサルさんたちは、年がら年中、エッチをしたがるようになったのです。普通、生き物たちには、特にエッチをしたがる一定の期間があります。発情期とも言いますね。

ところが、もうそんなルールは、このグループのおサルさんたちには通用しません。困ったものですね。はーっと、思わずため息が出てしまいました。

*

ところで、みなさん、腰みのやパンツを身に着けた野生の動物さんたちがいるというお話を、聞いたことがありますか？ 動物園やサーカス団に閉じ込められている一部のお友達やペットなど、「うだつの上がない種類の尻尾のないおサルさん」の子孫たちによって飼育されている動物たち以外には、まず、いませんよね。

これまでお話してきた数々のルール違反のせいで、もはや「うだつの上がない種類の尻尾のないおサルさんたち」とは呼べなくなってしまいました。

「元うだつの上がない種類の尻尾のないおサルさんたち」は、森から草原まで出て行き、モゴモゴをフルに使って、さらに多くのルール違反をするようになっていきました。うじうじした性格など、もはや影も形もなくなりました。

草原では、何と後ろ足だけで立って歩いたり、たったった一、どころか、さっさっさっさーと走れるようになりました。ここまで来ると、ルール違反が増えすぎて、もう「ずる賢い」とは言えません。「ずる」を取って「賢い」と言っても、「ま、いっか」状態になりました。

*

さらに、長い長い年月が過ぎました。年月と言いましたが、半端じゃなく長いんですよ。千年とか万年単位で考えてください。その半端じゃなく長い間に、半端じゃない変化が起きました。

何と、例のずる賢い、じゃなかった、賢い、うだつの上がない種類の尻尾のないおサルさんたち、じゃなかった、元うだつの上がない種類の尻尾のないおサルさんたちは、ものすごいでかい顔をして——大きな顔という意味ではありませんよ、偉そうにしてという意味です、念のため——森、草原、川原、海辺、湖畔、砂漠といった、ありとあらゆるところに出没するようになりました。

それだけではありません。木や石や粘土や干した植物などを器用に利用するだけでなく、ほかの生き物たちの皮なんかを剥(は)いだりして、それはそれは見事な巣——住居とか家とか屋敷とか宮殿とも言います、ついでに、これと似たもので墓とか社(やしろ)とか寺とか聖堂とか言う豪華な建造物もあります——を作るようになっちゃったのです。

外見も、腰の辺りだけでなく、体のいろんなところにいろんなものを着ける、つまりお飾り——衣服とか帽子とか靴とかアクセサリーとか化粧とかカツラも含まれます——なんてものも身に着けるようになりました。

*

なお、ここから、「元うだつの上がない種類の尻尾のないおサルさんたち」を、ヒトと呼びます。短くてチャーミングな名ですよ。な。「な、いいだろう？」って感じです。また、モゴモゴもモゴモゴって呼ぶのは、言いにくいのでやめます。言葉って名をつけましょう。「な、いいだろう？」って感じです。「賢い」は「賢い」でいいでしょう。「悪賢い」って言いたい気持ちもしますが、「ま、いっか」って感じでいきます。

さて、賢いヒトが言葉を使って、森だけでなく、草原、川原、海辺、湖畔、砂漠などで、数えきれないほどのルール違反をするようになったのですが、このルール違反に共通する大切な「ヒトだけの間のルール」が出来始めてきたのです。それは、何かを目にしたときに、「これは全部、わたしのものだ。わたしに任せとき」と主張する、というルールです。

森だけでなく、草原、川原、海辺、湖畔、砂漠などに古くからあるさまざまなルールは、もうルールではなくなってしまったのです。したがって、これからは「ヒトだけの間のルール」を、単にルールと名付けます。「な、いいだろう？」って感じです。

もうヒトにとって怖いものは、だんだんなくなってきました。何しろ、悪賢い、じゃなかった、賢いうえに、もごもご、じゃなかった、言葉を使うことで、過去にいろいろ覚えたことを代々伝えてきています。知識が蓄積されてきたということですね。そのために、ものすごい勢いで賢くなっていきました。

*

ここで、一つ謎々を出します。

ヒトがどんどん賢くなるにつれて、だんだん増えてきたものがあります。それは、何でしょうか？

みなさん、よく考えみてください。みなさんも、知っているし、使っているものです。みなさん一人ひとりにも付いています。あっつ！今のは大ヒントです。今の「付いている」で答えが分かっちゃったかな？ もう一つ、おまけの大ヒントをあげましょう。

な、いいだろう？ です。

そうです。大当たり。答えは、名（な）——つまり名前です。ヒトは、自分が何かを目にしたときに、「これは全部、わたしのものだ。わたしに任せとき」と言うと同時に、モゴモゴの子孫、言い換えると言葉を使用して、名前を付ける癖というカルールを知らず知らずのうちに身に付けていたのです。ヒトは、「これは全部、わたしのものだ。わたしに任せとき。な、いいだろう？」と言ったあと、「これを〇〇と呼ぶ。な、いいだろう？」と付け加えるのが習慣になりました。名前のないものに名前を付けることで、自分のものになる。これがルールとなったのです。

名って、なんて素晴らしいルールなのでしょう。いったん、名を付ければ、その名はどこへでも、持って行けます。ほかのヒトたちに対して、「これは、わたしのものだ」と宣言するさいの印(しるし)みたいなものにもなります。

この印で、知る、つまり、知識を得たり、蓄えたり、伝えたりすることができるのです。自分が死んでも、子や、その子や、またその子の子たちへと次々と、そして延々と残すことができます。ヒトって、賢いですね。すごいですね。まるで魔法じゃないですか。

*

この魔法もどきには、おまじないの文句があります。

しるしるちしる、しるかけて、つばつける

というのですが、広辞苑あたりで「しる・知る・領る」「しる・汁」「マーキング」「しるし・印・標・徴」「唾を付ける」を引いてみてください。辞書を引いているうちに、ハンコを始め、知(ち)も地(ち)も血(ち)も出てきますよ。出血大サービスです。

ハンコ、ペタペタ、ちっ、ちっ、ちっ。

なかなか含蓄のある文句です。こうなると魔法もどきじゃなくて、立派な魔法です。

これって、半端じゃないですよ。な、いいだろう？「いやー、名前って、本当にいいものですね」って感じですね。

しるしるちしる、しるかけて、つばつける。

蛇足ではありますが、このおとぎ話は、単なる与太話です。したがって、いかなる科学的、および、学問的根拠に基づくものでもありませんので、その点をどうか、よろしくご理解並びにご了承願います。

(つづく)

テラ取り物語——後編

まず前編のおさらいのために、前編のおしまいの部分をもう一度、話させてください。では、いきます。

名って、なんて素晴らしいルールなのでしょう。いったん、名を付ければ、その名はどこへでも、持って行けます。ほかのヒトたちに対して、「これは、わたしのものだ」と宣言する印みたいなものにもなります。

この印で、知る、つまり、知識を得たり、蓄えたり、伝えたりすることができるのです。自分が死んでも、子や、その子や、またその子の子たちへと次々と、そして延々と残すことができます。ヒトって、賢いですね。すごいですね。まるで魔法じゃないですか。

この魔法もどきには、おまじないの文句があります。

しるしるちしる、しるかけて、つばつける

というのですが、広辞苑あたりで「しる・知る・領る」「しる・汁」「マーキング」「しるし・印・標・徴」「唾を付ける」を引いてみてください。辞書を引いているうちに、ハンコを始め、知も地も血も出てきますよ。出血大サービスです。

ハンコ、ペタペタ、ちっ、ちっ、ちっ。

なかなか含蓄のある文句です。こうなると魔法もどきじゃなくて、立派な魔法です。

これって、半端じゃないですよ。な、いいだろう？「いやー、名前って、本当にいいものですね」って感じですね。

*

そんなふうにな名前という魔法を手にしたために、ヒトは、名前の付いた場所、つまり、自分たちの土地をどんどん拡大していきました。もちろん、簡単に土地を広げていくわけにはまいりません。ヒト同士の間で、争いが絶えないのです。なにしろ「わたし」が次々と現れるのです。

しるしるちしる、しるかけて、つばつける。

「ここは、わたしものだ。だから、ここにあるものは、全部、わたしのもの——」「いや、ここに名を付けたのは、わたしのほうが先。だから、ここにあるものは、全部、わたしのもの——」

「おまえたちは、何を言っているのだ。わたしのほうが、先に名付けたんだ。だから、ここにあるものは、全部、わたしのもの——」

「わたし」「わたし」「わたし」……、とにかく切りがないのです。

ヒトは、仲間、つまりヒトや、ほかの生き物を殺める天才です。石、弓、刀、先のとがった棒切れ、場合によっては火——そうしたものを使って殺める方法を身に付けていきました。つまり、ヒト同士で戦うために、そして狩や漁をするために、いろいろな武器を手にしていったということですね。

*

ところでヒトは、たいていのものなら何でも食べちゃうのです。雑食というやつです。したがって、何でも食べちゃうために、邪魔になるものや食べるものを、壊しちゃう、ちよん切っちゃう、切り刻んじやう、潰しちゃう、剥いじやう、削っちゃう、そのあげ

くには殺めちゃうということが、当たり前で平気になりました。

そうなっちゃった以上、とにかく切りがないのです。

たくさんの血が流れました。たくさんの首が飛びました。あちこちで、ジュージューと、ヒトの肉の焦げる臭いもしました。ヒト同士、または、ほかの生き物たちを相手に、ヒトは戦い、殺める方法を覚え、だんだん熟達していきました。手先が半端じゃなく器用なのは、先祖譲りです。

ヒト同士の 경우에는、親指一本で、相手を倒せるつわものまでいます。みぞおちとか喉のあたりを狙うらしいのです。ああ、怖い。マジこわ。テレシコワ。わたしはかもめ。かもめはかもめ――。

支離滅裂の失態をお許してください。きな臭い、生臭い、血生臭い話は、大の苦手なのです。つい、うろたえてしまいました。

*

しるしるちしる、しるかけて、つばつける。

一方、名付けは、延々と続いていました。たくさんの「わたし」たちが、次々と「わたしのもの」だと言って譲らないのです。ちなみに、それぞれの「わたし」は自分の名前を持っています。でも、とっても大切なものなので、めったに口にしないなんてルールを持っているグループもいたみたいです。

とにかく切りがありません。アイ、マイ、ミー、マイン。イツツ・マインとわめく、言葉の違う、よそのヒトたちまで出てくるのです。

縄を張って、「わたしのもの」というヒトたちもいれば、どこからともなく現れて、てりてりとりとり、とりてりとりてり、てりとりてりとり、なんて訳の分からない言葉でわめく、よそのヒトたちが後を絶ちません。

とにかく切りがないのです。たくさんの「わたし」たちが、「これは、わたしのものだ」と言い張る土地のことを、ここからは、全部ひっくるめて縄張りと呼びます。これで、すっきりしましたね。

*

あっ、ちょっと待ってください。「縄張りなんて言葉、いやだ、いやだ」と、いう声が聞こえました。このおとぎ話に出てくるキャラクターさんの一匹、いやーケ、というより一名ですか、とにかくそのキャラクターさんの声がします。

縄張りって、ぴったりで、いい言葉なのに、なぜなんでしょうね。「もっと、カッコいい言葉が欲しいーい」なんて、わめいていますよ。ひょっとして、さっきの訳の分からない言葉を使う、よそのヒトたちの喋っていた言葉のほうがカッコいい、みたいなことを言っているのでしょうか。

えっ？ やっぱりあっちのほうがいいなんて、キャラクターさんが贅沢を言っています。てりてりとりとり、とりてりとりてり、てりとりてりとり、でしたっけ？ 早口言葉みたいで言いにくいです。でも、何か意味深ですね。

そういえば、テラって言葉があります。てら銭の「てら」ではなくて、ラテン語で土、土地、陸地、大地って意味らしいです。ということは、地球もテラってことになります。何かそんな言葉の出てる、SFがあった記憶があります。

じゃあ、テラを取り合うのだから、テラトリなんてどうでしょう、キャラクターさん。えっ？ テラを取るという感じの専門用語があるのですか？ で、響きが良くない？ じゃ、ちょっと訛って「テリ取り」はどうでしょう？ えっ？ どうせなら「テリトリー」まで訛ってくれ、ですか？ はい、承知いたしました。では、これからは、「わたしのもの」って叫んだ土地は、テリトリーと呼びます。この名前で、よーござんすか？

しるしるちる、しるかけて、つばつける。

*

いやー、名前って、本当に便利ですね。今、名前って呼びましたが、名前の数はすごく増えました。どうやら、種類もいろいろできてきたみたいなのです。見た目、聞こえ、匂いや臭い、味、手触り、雰囲気、有り様、ぴんと来たり、びびっと来る感じ——そうした、もの、こと、さま、などを表す、いろいろな名前ができました。とにかく切りがないのです。品詞？ そんな難しくて品のない言葉は、このおとぎ話では使いません。

こうしたいろんなものを、全部、ひっくるめて、前から使っている「言葉」という言葉で、呼ぶことにします。いやー、言葉って、本当に便利ですね。今度は、「言葉」という言葉で、ヒトが何をやってきたのかを説明しましょう。

*

祈りの言葉。これは、天とお話ができると言い張るヒトが独り占めしていました。ヒトが定めてきた、たくさんのルールを表す言葉たち。これは、掟と呼ぶようになりました。まだまだ、あります。とにかく切りがないのです。

たとえば、火のおこし方、天とお話ができると言い張るヒトをおだてる方法（※これって、ヒトにとっては切実な問題なのです）、ウシの育て方、シカの狩り方、料理の仕方、武器の作り方、薬草から薬を作る方法、薬草から毒を作る方法（※今挙げた2つは基本的には同じです。目的が違うだけです）.....。

敵と戦う方法、亡くなったヒトを葬るしきたりの手順、天とお話ができると言い張るヒトに頼らずに天にお願いする方法、言葉が通じないよそのヒトとやりとりをするときのコツ、馬鹿話.....。

はたまた、祖先の名の数々とその祖先たちが何をしてきたかの話、不思議な体験をしたヒトが語った話、トランス状態になって不思議な「夢」を見たというヒトの語った話.....。

仲間を癒やす時の言葉、仲間を励ます時の言葉、ルール違反をした仲間をいじめたり懲らしめたりする時の言葉、男女を結びつけ家を持たせる時の段取り、これから先どうなるかを知る時に行う秘密めいた儀式、恐ろしい自然の力にごまをする方法.....。

こうしたこと全部が、言葉になったのです。とにかく切りがないのです。

しるしるちしる、しるかけて、つばつける。

*

あまりにも、たくさんの言葉や話や掟やおまじないがあるので、それを覚えきれぬヒトはとても尊敬されていました。いるんですよ、みなさんの中にも、百人いれば、一人か二人は、たいていいるんです。脳の働きがほかのヒトと違うのでしょうか。ところが、そういうものすごい記憶力とか、情報処理力の面で群を抜いて優れた脳の持ち主がいなくても、大丈夫になりました。

大発明があったのです。話している言葉を、板や土の上に印を付けて思い出す方法を考えついたヒトたちがいたのです。搔く、つまり、引っ搔いたり、彫ったりするだけではなく、小枝や毛を束ねたものなどに色を着けて塗ったりするんです。あー、びっくり。これを「文字」という言葉で呼びます。

いやー、文字って、本当に便利ですね。あの、うじうじ、もじもじしていた、うだつの上がらない種類の尻尾のないおサルさんたちが、モゴモゴを言い始めたと同時に、とちくくの出し、数々のルール違反をするようになり、ながーい時が過ぎ、とうとう文字というすごいものを発明したのです。たいしたものです。

もっとも、こうした文字を持たないままで暮らし続けたヒトたちのグループも、たくさんありました。文字なんて、あえて持たなくても、そんなに不自由するものではありませんから、当然です。

結果的には、文字を持つグループが、てら銭取り、じゃなくて、テラ取り、じゃなく

て、テリトリーを一番広げましたので、現在では文字があって当たり前みたいになっていますが、話は全く逆なのです。文字があるほうが、当たり前じゃない、つまり、変だったんです。最初のころでしたけど、「かなり変」だったのです。

しるしるちしる、しるかけて、つばつける。

でも、ヒトの歴史を見てみると、どうやら、「かなり変」なことが優勢になっていく傾向が見られます。徹底的に「とちくるう」ことを決意した種（しゅ）、あるいは、そんな遺伝子を持った種、それがヒトみたいですね。

*

さて、文字のことは、これくらいにして、さきほどちょっと触れました掟とおまじないのお話にもどります。

テリトリーを維持し運営するためには掟とおまじないが、とても大切な役割を果たします。何しろ、ヒトという生き物は「変」が基本ですから、放っておくと、どんどん「変」になっていきます。

そのことに、ヒトは大昔から薄々気づいていた節があります。良く言えば、自制心とか歯止めという言葉が、それに当たります。悪く言えば、テリトリーを独り占めしたい一部のヒトが、作り出した脅迫です。自分や、自分のごく少数の仲間たちだけにとって都合のいいように作った脅迫文集です。

「○○○しちゃだめよ。したら、ただじゃ済まないよ。たとえば、△△△しちゃうからね」。「□□□するときには、必ず、▽▽▽するんだよ。これを守らなかったら ☼☼☼ しちゃう。分かった？」

掟は、こんな感じでした。作ったのはヒトなんですけど、例の天とお話できると言い張る、ごく少数のヒトがからんでいる場合も珍しくありませんでした。掟の作者を分類しましょう。

まず、やたら何でも仕切りたいヒトたちがいますけど、これは支配者と呼びましょう。

次に、自分はただのヒトのくせに、天とお話ができると言い張って、本当かどうかは知りませんが、そのお話の報告だと称する言葉を吐くヒトたちがいますけど、これはシャーマンって呼びましょう。

カメさんの甲羅や、シカさんの骨を火であぶると、パチンなんて、ひびが入りますね。そのひびを眺めながら、これから先に何が起きるかを当ててやる、なんて言い張る癖のあるヒトたちがいますけど、これは占い師と呼びましょう。

——ちょっと、黒板を利用させてください。チョークありますか？ あった、あった。で、「預言者」とか、「予言者」って、両方とも「よげんしゃ」なんですけど、区別しろといっとうるさいので、こういうヒトたちもいますと、ご紹介しておきます。いいですか、よげんしゃさんと、よげんしゃさん？ 気が済みました？——良かった。

ちなみに、シャーマンとは違うんだって言い張る、よげんしゃさんも、いるんですよ。そんなのどっちだって同じだよ、なんて言う、テキトーなよげんしゃさんもいますけど。

*

今、ご紹介しましたヒトたちは、言葉にはパワーがあると口をそろえて言い張ります。ちなみに言葉はみんなのものですから、みなさん毎日お使いになっていますね。その意味では、みなさん一人ひとりが言葉の専門家であり、言葉の達人なんです。

だから、自信を持ってください。今、ご紹介したヒトたちは、言葉を独占しようとしています。意図はさまざまでしょうが、「言葉はみんなのもの」という当たり前のことに、けちをつけているんです。「言葉はみんなのもの」——これだけは確かです。動かせない事実というやつです。

ですから、みなさんは、これまで紹介したいろいろなヒトたちの言葉を鵜呑みにする

のではなくて、言葉にパワーがあるのかどうか、あるとしたら、どんなパワーなのか、自分にとってプラスになるものなのかどうか。そんなふうに自分の力、つまり自分のパワーで考えてください。

安易に、他人に頼るのではなく、まず自分の体と頭に尋ねましょう。最後は、自分しか頼りになるヒトはいませんよ。プロとか、師とか、士とか、〇〇の神様、なんていう偉そうな言葉で自分自身を呼んだり、ヒトからそう呼ばれても平気で呼ばせておいて、何も感じないヒトは「変」です。

勘違いしないでくださいね。今しているのは、言葉に限ってのお話です。大工さんやお茶碗を作るヒトみたいに、物と真剣に取り組んでいる職人さんには、プロとか、まるで神様のような素晴らしいスキルを身に付けたヒトたちがいます。

そういうヒトの言葉に耳を傾けましょう。無口なヒトが割と多いのですが、ぼそっと、すごいことをつぶやくことがありますよ。そのヒトたちのしていることは、言葉だけじゃありませんもの。机上の空論の正反対です。地に足が着いている、とかいうやつです。尊敬に値します。

*

さて、テラ取り、つまり、この惑星を奪い取ってしまった気になっているヒトという種は、これから先どうなるのでしょうか？

そのヒトたちにも、ちっちゃなお子さんや赤ちゃんがいたりします。本当に、そのお子さんや赤ちゃんたちのためになることを、やっているのでしょうか？ 何かを言葉で名付けたために、その何かが見えなくなっている。そんな気がするのです。

名付けたものは、全部自分のもの。全部知っているはず。全部分かるはず。全部自分の言うことを聞くはず。今のところは、ちょっとしか分からないものもあるけど、いつか絶対に分かる。言うこと聞かないものの、いつかは自分の前でひざまずくに決まっている。ひょっとして、ヒトはそんな思い込みをしているのでは――。そんな気がしてなりません。

*

脳ブームが続いています。そもそも、うだつが上がらない種類の尻尾のないおサルさんの脳の中で、何かズレちゃった、本能が壊れちゃった（※これを「本能寺の変（＝ほんのうてらのへん）」とか言うとか言わないとか）。そのせいで、ヒトになっちゃった。そんな説があるそうです。どうりで脳にこだわるわけですね。執念を燃やすわけですね。

どうにもとまらない、だめだこりゃ状態が常態になっているのも無理はない。ノー・モア・ノーズ（＝No more 'no's.）。脳はもう結構ざんす（＝脳に悪いことばかりしようぜ）。でも、ワナ・ノー・モア（＝Wanna know more.）。もっともっと知りたいのだ。これは、ヒトに仕掛けられた「欲望という名（な）のワナ（※やっぱり、ここでも名が付いて回るんですよー、どうあがいても無理なんです）」かも知れない。ワナは、電車のように止まらないのでしょうか。

ワナ、ナワ、ワナ、ナワ。

禍福（かふく）or 吉凶（きっきょう）は糾（あざな）える縄（なわ）のごとし。

ジンセイ、ラクありや、クもあるさ。グッド、ラクック。クラクラクラ。ラクラクラク。

ワナナワワナナワワナナワ。

失礼いたしました。これでも、言霊をお招きし、祈りをささげて、我流の御祓（おはら）いをしていたのです。そうせずには、いられなかったのです。本気です。正気だという意気も勇気も元気も根拠ありませんが、本気です。

さて、ヒトの欲望という名のワナに話をもどしましょう。

滅亡へのワナかもしれない――。そうだとしたら、わなわな震えるしかないのでしょうか。イヤ、無理だ。駄目だ。有り得ない。アンビリバボ。インポシボ。そんなのヤだ。

だから、ヒトは頑張る、気張る、踏ん張る、威張る——てなことは百も承知ですけど、やめませんか、そろそろ。

しるしるちしる、しるかけて、つばつける。

*

ところで、「おまじない」を、漢字をまじえて書くと「お呪い」となりますね。これじゃ、「呪（のろ）い」と同じではありませんかー。ああ、怖い。ヒトは呪われた生き物ではないか、と思っちゃいます。

さて、上のおまじないの出だしの部分に「漢字＝感字」を当ててみましょう。

知る領る地知る
知る知る知知る
知る領る血知る
知る知る血知る
知る痴る血汁

恐ろしい、お呪いですね。悪マジ無い、という「感じ＝感字」です。ちょっと、ここで、上記の「当て字＝感字」の説明をさせてください。

地（ち）に「しる＝汁＝おしっこ」をかけて、その場所を「知る」
＝「領（し）る（※広辞苑に載っています、「自分の領地にすること」です）
＝「痴（し）る（※これも広辞苑に載っています、「痴（し）れる」とも言い、「頭がおかしくなること、変になること」です）」という具合に、

自分の「なわばり＝縄張り＝テリトリー」を作ろうとか拡大しようとするマーキング行動は、ワンちゃんやネコちゃんや他の生き物たちの行動だけでなく、ヒトにもあると言うよりも、

むしろヒトが最もエスカレートした大規模なマーキング行動を行っている、

と言えそうです。

要するに、どうやらヒトは、知り＝領り＝痴りすぎたようです。

しり過ぎたのね、あなた。

*

また、ヒトは、土地（ち）や物を名付けることにより、

「しる＝知る＝知（ち）＝知識」を得て、

その争奪戦のさなかに、

おびただしい量の「血（ち）（※ヒト同士の間で、また他の生き物を相手に）」を流すことにより、

「テラ＝地（ち）＝大地＝地球」をいわば「テラ取り」して、

テリトリーを拡大してきたと言えそうです。

ち、ち、ち。

ヒトのマーキング行動は、単に「おしっこ（＝汁）をかける」とか、「唾を付ける」なんて、生やさしいものではありません。ということは、

ち、ち、ち、

は、

地、知、血

と感字で書けるわけです。

したがって、

しるしるちしる、しるかけて、つばつける、の出だしは、

知る領る地知る

知る知る知知る

知る領る血知る

知る知る血知る

知る痴る血汁

とも書けるのです。

*

やっぱり、この恐ろしい魔法のおまじないは、そろそろ、やめませんか。おまじないは既に実現しているのです。あとはエスカレートし、他の生き物たちを道連れに、全滅への道を進むだけ。もう十分に知った＝領った＝痴ったじゃないですか。叱咤（しった）激励など、もはや要りません。そう言いたい気分です。

暗く終わって、ごめんなさい。でも、実際、ヒトが改まらない限り、青と白に輝く、この美しい星の未来は暗いみたいなんです。

あなたや、あなたの家族や、あなたのお友達や、あなたとは無縁でも、同じヒトの、赤ちゃんや、ちっちゃなお子さんにとっての未来ですよ。

こんなんやってて、いいんですか？

そうだ、ぱっと、希望の明かりをともしましょう。これならできそうです。

希望の明かり――。そうです、希望を捨てちゃ、駄目ですよ。

では、みなさま、一緒に。希望のおまじないです。

ぱっ。

蛇足ではありますが、このおとぎ話は、単なる与太話です。したがって、いかなる科学的、および、学問的根拠に基づくものではありませんので、その点をどうか、よろしくご理解並びにご了承願います。

とはいえ、シリアスに受けとめていただければ、それに勝る喜びと希望の芽はありません。

再度、ぱっ。

合掌。

(了)

宇宙法廷審理中

宇宙法廷審理中——第1話

今は昔。昔は今。
昔々のお話です。

宇宙で、ある裁判が行われました。ただ今、「行われました」と過去のこのように書きましたが、実はこの裁判は現在も続けられているのです。つまり、事件は宇宙法廷で審理中なのです。

どうやら事件は、この惑星が舞台であると言いますか、地球で起こりつつある状況が、裁判での判決を左右するようなのです。

長い長い裁判です。でも、宇宙という時空のレベルから見た場合には、ほんの一瞬とも言えそうです。

このように、話が宇宙規模になりますと、この惑星に住む生き物たちや、自らをこの惑星の支配者だと決めこんでいるヒト、つまりホモ・サピエンスと自らに尊称を与えている尻尾のないおサルさんにとっては、事件の経過とその審理期間は計り知れない長いものとなります。

また、宇宙法廷ともなりますと、ヒトが用いている言語や貨幣に代表される、表象とか象徴と呼ばれる仕組み以外の多様な仕組みを基盤とする認識や伝達の形式と手段が使用されていますので、非常にややこしい話となります。

こうしたややこしい話は、理屈よりも、比喩つまりたとえることで、暗示するとかほめかす以外に、語る方法はないと思われれます。というわけで、このお話は、きわめてややこしく込み入った裁判のお話を、この惑星を牛耳っているつもりのホモ・サピエンスの認識形式である象徴という仕組みにのっかって語る以外に、みなさんにお伝える方法がありません。

以上のことを頭に入れたうえで、お話を聞いていただければと存じます。

*

ん？ はあ？ 何じゃこれ？

そんな具合に首を傾げていらっしゃる方のために、簡単な比喩で説明し直しましょう。

宇宙会議は、国連での会議みたいなものだとお考えください。ただし、これはあくまでたとえですので、本当はそれほど簡単に説明できるたぐいのものではないのですが、致し方ありません。

ご承知のとおり、国連での会議では、複数の言語が使われていますね。会議が同時通訳で行われ、その結果は複数の言語に翻訳されてまとめられた報告書という形で保存されます。

それとほぼ同じように、このお話は、宇宙のさまざまな生き物および存在が用いている、多種多様な認識と伝達の仕組みを基盤とする、いわば「言語」で討論されつつある内容の一部を、日本語というこの惑星の一部のヒトによって使用されている言語の一つに翻訳したうえで要約したものだ。そのようにご理解願います。

前置きが長くなりました。さっそく、お話そのものに入ります。

*

昔々、太陽系にある地球という惑星に、おびただしい数の生き物たちに混じって、尻尾のないおサルさんたちが何種類かいました。ちなみに、英語では尻尾のあるおサルさんを monkey、尻尾のないおサルさんを ape と区別していますね。一般に、尻尾がないおサルさんのほうが「高等」だ、と尻尾のないおサルさんの変種であるヒトは決めつけているようです。

ここからは、少々ややこしい事情を説明しなければなりません。できるだけ簡単に要点をまとめてみます。

昔々に、尻尾のないおサルさんたちのうちでも、特にうだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんの脳内で何かが起こってしまったらしいのです。その結果、うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんは、ヒトつまりホモ・サピエンスになっちゃった。

何が起こったのでしょうか？

ヒト自身もいろいろ考えてみたもようです。「脳の中でとてつもないズレが生じてしまった」とか「本能が壊れてしまった」などという説もあります。いずれにせよ、結果

的にどうなっちゃったかと申しますと、「ヒトが用いている言語や貨幣に代表される、表象とか象徴と呼ばれる仕組み」を、うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんが、なぜか獲得してしまったみたいなのです。

宇宙には、多種多様な生物および非生物が存在し、多岐にわたる仕組みが働いています。「表象や象徴と呼ばれる仕組み」とは、そのうちの一つにすぎません。

原理はきわめて単純です。

何かの代わりに「その何か以外のもの」を用いる。つまり、代用する。

これだけです。その最たるものが言葉です。たとえば、「花というもの」を「花という言葉」で代用する。または、「〇〇という言葉」を「◯◯という言葉」で代用する。そんな仕組みです。

お金も代理です。お金があれば、その額面で何でも買えます。ということは、お金がいろいろなものに化けるとも言えます。さらには、お金はありとあらゆるもの代理であるとも言えます。

以上のように、実にシンプルなのですが、これが数を増しますと、途方もなくいろいろなことができるようになります。言葉や貨幣つまりお金だけでなく、地位や能力や知力やスキルや権威や権力や腕力や魔力や武力などといった多種多様な代理・表象・象徴は、どんどん増殖していくメカニズムをそなえているのです。

*

以上述べたことを、もう少し詳しく説明しましょう。

「何かの代わりに『その何か以外のもの』を用いる。つまり、代用する」という仕組みは、知覚器官を備えた地球上に生息するほとんどすべての生物に共通して備わっています。

知覚という仕組みとは、生物の周囲にある物や現象を、知覚器官が「情報＝データ＝信号」として受信し、シナプスを通して伝達し、脳細胞に送り込むというシステムです。言い換えると、知覚器官から脳にいたるまでの各所で生じている信号あるいは情報の伝達と処理という形でしか、生物は自分の周りの環境を知覚できないのです。

つまり、知覚の仕組みとは代理の仕組みとほぼ同じというわけです。

これは生物にとって生存に不可欠な良く出来たシステムであると同時に、生物にとって免れることができない限界であるとみなすこともできます。

さて、ヒトも、基本的には生物と同じ知覚のシステムを備えているわけですが、そのシステムが過剰で途方もない量とレベルで機能しているのです。なぜなら、他の生物に比べて脳が異常に発達してしまったからです。

そのために、ヒトは自らの生存に最小限必要な周りの情報だけでなく、世界、宇宙、森羅万象までを知覚し認識できると確信する能力を獲得してしまったとも言えます。誤解のないように言い換えますが、「思い込みの能力」という意味です。

ですから、知覚も認識も、しよせん「情報＝信号」という代理および象徴を、脳が受け取る仕組みにすぎないことを忘れてはなりません。それにもかかわらず、ヒトは知覚と認識が代理であることを、しばしばうっかりと忘れてたり、あるいは故意に忘れようとする傾向があります。

つまり、ヒトは自分たちが世界、宇宙、森羅万象を直接的に感知していると、つい思い込んでしまう、あるいは信じたがる習性があるということです。言い換えると、表象つまり象徴を現物と取り違える、あるいは現物にきわめて近いものとして認識するという、かなり鈍感でずさんで無神経で大胆な勘違いをしがちだということになります。

これは、不遜と傲慢さに満ちた行動につながります。現に、目下宇宙法廷の審理の一環として、シミュレーションの下で生息しているヒトは、自分たちが地球の支配者だと思込んでいます。危険ですね。うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんの脳内異変事件を審理中の宇宙法廷が、この危うい事態に対して大きな懸念をいただいているとの情報が法廷外に漏れつつあります。

話が前後しますが、かつて、地球という惑星でうだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんの脳が「知覚という仕組み」を逸脱した「表象つまり象徴という仕組み」を獲得した時点で、宇宙に散在する生物および非生物たちは、うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんが恐るべき可能性（＝危険性）を手にしたことを察知していたのです。

というわけで、そのリスクをはらんだ仕組みが、地球という惑星に生息する他の生物および非生物にどのような影響を与えるかをシミュレーションという形で実験してみようということになりました。

たった今、簡単に述べた経過は、実はもっと込み入った話なのです。あまりにもややこしいので、半分、いやそれ以上は嘘になるくらい、あっさりとして簡略化して説明したことを、ここでお断りいたします。とにかく話を進めましょう。

*

この実験つまりシミュレーションには、「ある種のコンピューター」が使われていま

す。「ある種の」と断りを付けたのは、「1か0か」という二進法を基本とする、がむしゃらな、つまりめちゃくちゃ大量かつ高速な計算で作動する、ヒトが用いている原始的なコンピューターとは違ったものだからなのです。

ただし、そのメカニズムについては、ヒト全般に共通する言語という仕組みには翻訳できませんので、「ある種のコンピューター」と比喩的にほのめかすしかありません。この点を、どうかご了承願います。

いずれにせよ、ご理解いただきたいのは、現在、地球という惑星に生息するヒトの行動についてシミュレーションが行われつつあるという点です。言い換えると、宇宙法廷は、うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんが獲得してしまった、前述の仕組みの是非を現在審理中なのです。ただ今申しました「前述の仕組み」をおさらいしましょう。

何かの代わりに「その何か以外のもの」を用いる。つまり、代用する。

これだけです。みなさん、テレビをご覧になりますよね。あれって、画素を集めた静止画像をコマ送りしているだけらしいです。でも、そこに映っている映像を現実みたいと思いついてしまいますよね。さもなきゃ、テレビから情報を得たり、「ぎゃはは」なんていって楽しんだりできません。さらに言うなら、テレビのスピーカーから聞こえる音声も再生された機械音です。

要するに、現実の代わりに人工の画像と音声を用いている。代理を見聞きしている。それなのに、現実みたいに見えるし聞こえる。そういうことです。お分かりいただけただろうか。

*

ここで、宇宙法廷の審理の資料となっているシミュレーションについて少しだけ説明をいたします。たった今、シミュレーションという言葉を使いましたが、この「実験」はヒトにとっては「現実」（※括弧付きであることに注目して下さい）です。現在、ヒトは足止めを食っている状態にあるというのが正確な言い方です。言い換えると、「今は昔」かつ「昔は今」であると同時に「今は今」であり「今見ているのは夢」なのです。

ややこしいですか？

そうかもしれません。何しろ、実験の対象となっているヒトとは、この駄文を書いている者、そしてこの駄文をお読みになっているみなさんのことなので、頭の中が

混乱しますよね。

こういう場合には、この駄文を単なる与太話、ガセとお考えになればいいのです。しよせん、ただの言葉の羅列なんです。それが、「何かの代わりに『その何か以外のもの』を用いる。つまり、代用する」という、きわめてシンプルな仕組みの必然であり、限界なのです。致し方ありません。気にせず、話を続けましょう。

とはいえ、少々込み入ってまいりましたので、いったん、ここで休憩をしましょう。

(つづく)

宇宙法廷審理中——第2話

昔々のお話です。

太陽系の惑星の一つである地球に生息する、うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんの脳内で、異変が起きたらしいのです。何が起こったのかを単純化いたしますと、次のように要約できます。

何かの代わりに「その何か以外のもの」を用いる。つまり、代用する。

これだけです。こうした仕組みを基本とする認識と思考と行動ができるようになった、うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんはヒトと呼ばれています。みなさんがよくご存知のお話です。難しく考えないでください。

代表的な例は言葉つまり言語です。たとえば、「花というもの」の代わりに「花という言葉」を使って、ヒトは花についての知識や情報を得たり、他の人にその知識や情報を伝えることができます。文字という話し言葉の代用品を用いれば、その場にはいない相手や子孫にまで、知識や情報を伝えることができます。

すごい発明です。でも、これは発明というより、脳内でどういうわけか起こってしまった「アクシデント＝事故＝偶然＝珍事」と言うほうが適切かと思われます。

ヒトが獲得してしまったこの仕組みについて、現在、宇宙法廷が審理をしているらしいのです。

地球でこんなんできてしまったけど、大丈夫やろうか？——

あの惑星の他の生物や非生物に、どんな影響を与えるかが心配やないか？――

コンピューターでシミュレーションして、どうなるか実験してみようやないか？――

なんやら、とんでもないことになるような気がせいへんか？――

そんな具合に、目下、ヒトはシミュレーションの対象となっているらしい。ここでは、そんなお話をしております。馬鹿話、与太話としてお読みください。ややこしく考えた方はややこしく、深刻に受け止めざるを得ない心境の方は深刻にお考えください。

なお、さきほど述べましたシンプルな仕組みには、増殖し肥大化するという特性もあります。言葉だけにとどまらず、貨幣つまりお金、価値一般や地位や能力やスキルや権威や権力や腕力や武力や精力や勢力といった具合に、どんどん状況が進展してまいります。この辺の事情を次に説明します。

*

ものやことの代わりに、言葉が使われ伝達される。これはコミュニケーションとか通信と呼ばれているものです。保存されると図書館とかアーカイブスとかコンテンツと呼ばれます。

ものやことやさまや空想や幻想はお金に置き換えられます。お金は有形無形を問わずありとあらゆるものの代理として、流通します。さきほど述べました、地位や能力やスキルや権威や権力や腕力や武力や精力や勢力も、お金で買えます。言葉とは違った意味で、お金は究極の代理だと言えそうです。

何かの代わりに「その何か以外のもの」を用いる。つまり、代用する。

たったこれだけの仕組みが、グローバルな規模でのとんでもない大きな動きになってしまいました。ヒトの世界は、言葉とお金の二大代理で動いている。そう言っても過言ではありません。

だから、宇宙法廷が審理しているのでしょう。

「ちょっと待って――。過去から現在にかけて、地球で起こってきたことがシミュレ―

ション、つまり実験であると同時に、現実、つまり本番だって意味？ そうなら矛盾しない？」

そのような疑問をいただく方は、多いと思います。「シミュレーション」「実験」対「現実」「本番」――。今挙げた四語の前半と後半が矛盾するという理屈ですね。そのご質問に対しては、そうした疑問をいただくことこそが、この駄文で何度も繰り返している、次の仕組みに基づいている証しだ、としか申し上げられません。

何かの代わりに「その何か以外のもの」を用いる。つまり、代用する。

再度、取り上げたこの仕組みを「表象」とか「象徴」の仕組みと呼んでいる人もいます。

人間は象徴なしでは生きられない。また、象徴はひとり歩きする。肥大化もする――。このように考えると、恐ろしい気もしないではありません。素晴らしいという考え方もできるでしょう。その両方をひっくるめて、すごいなあと感心してしまいます。でも、話はそれだけに留まらないのです。

以下に、代用・代理および表象・象徴という仕組みを、仮定と比喩という二つの言葉で説明する説を、要約してご紹介いたします。

*

仮定とは、「もしも〇〇だったら」と考えることです。想像とか空想とか妄想とか呼ばれているものの親戚でしょう。これって、「何かの代わりに『その何か以外のもの』を用いる。つまり、代用する」ことを頭の中でやっちゃうことじゃないでしょうか。

たとえば、自分は空を飛べるスズメじゃない人間なんだけど、人間である代わりにスズメだったらなあ、と考える。これは、言葉を獲得してしまった人間が得意とする思考ではないでしょうか。

確かに、自分が人間だと思い込んでいるペットのわんちゃんや、にゃんこもいますが、そのレベルを超えた話だと思われまます。ちなみに、あれは、人間に飼われているために、そうなっちゃったんでしょうね。

仮定の次に、比喩について考えてみましょう。比喩とは、たとえですね。もっと簡単に言うと、「△△みたい」と考えることです。これも、代用の変形というか応用です。AじゃないのにAみたいだと想像したり、口に出すわけですから。

このように、仮定と比喩の二つは、代用と象徴という仕組みと深くかかわっているようです。個人的な意見なのですが、仮定と比喩の二つは、人間にとって究極の武器だとかねてから思っております。簡単に申しますと、「もしも〇〇だったら」と「△△みたい」の二つがそろると、人間は最強の武器を手にしたのも同然だということです。

尻尾のないおサルさんの仲間的一种として、うだつの上がらなかった身から、突如、脳に「ズレ」か「異変」が起きた。そして、晴れて、「おサルさん+ α =狂えるおサルさん=cruel おサルさん=残虐なおサルさん=ヒト=ホモ・サピエンス=英知人=H人=エッチ人=人類=塵類=人間様=お山の大将=思い込み大賞=大勘違い平行棒=自称地球の所有者兼支配者兼総代兼総長」になった。

実に運のいいやつです。ジャンボ宝くじの一等に当たったなんてもんじゃ、ありまへん。それ以上です。例を挙げましょう。

*もしも（仮定です）鳥さんみたいに（比喩です）空を飛ぶことができたらなあ。→飛行機

*もし、お魚みたいに、すいすい水上を進んだり水中を潜れたらなあ。→舟、船、潜水艦

*もし、お馬さんや鹿さんみたいに速く走れたらなあ。→三輪車、自転車、自動車

以上は、ごく原始的な例ばかりです。次にヒトは、「もしも〇〇だったら」と「△△みたい」に改良を加えて、大革命を起こし、さらに究極的な武器=魔法を手に入れました。

比喩を魔法に転換させたのです。言い換えると、「△△のみたいに」の「△△」を「魔法=妄想=ブラックボックス=ブラックホール=何でもあり=めちゃくちゃ=無節操=無尽蔵=ドラえもののポケット」に変えてしまったのです。

これも、例を挙げましょう。

*もし、「魔法みたいに」（あっさり書きましたが、これって大革命です）、遠くのがみえたらなあ。→望遠鏡。双眼鏡。テレビ。天体望遠鏡。電子望遠鏡。

*もし、魔法みたいに、遠くの音が聞けたり、遠くのヒトと話せたらなあ。→電信。有線電話。無線電話。(中略)インターネット。ケータイ。

*もし、魔法みたいに、病気が治せたらなあ。→医学の進歩について、想像してください。ありすぎて書けません。

*もし、魔法みたいに、お金儲けができたらなあ。→経済・金融について、想像してください。ありすぎて書けません。ただ、現在は、その根底が怪しくなっています。

*もし、魔法みたいに、敵を負かすことができからなあ。→軍事について、想像してください。ありすぎて書けません。というか、書きたくもありません。

*もし、魔法みたいに、魔法ができるようになればなあ。→宗教、占い、スピリチュアル、自己啓発、手品、ギャンブル、詐欺——について、想像してください。ただし、この種の「魔法=阿呆=アホ」には、かなり節操のない、貪欲で強欲な想像力と出まかせとほったりが必要です。

以上が、代用および象徴という仕組みを、仮定と比喩という二つの言葉で説明する説の概略です。

*

どうやらヒトは、行き着くところまで行き着きながら、まだまだ自分たちが先に行き着けるところがあると信じきっています。たくましいですね。欲にも限界があるということ、この世界的規模の大不況を機会に、ちょっとでもいいですから、立ち止まって考えてほしいなどと老婆心をいだいてしまいます。

漏れ聞くとところによりますと、宇宙法廷で目下審理中の案件は、ヒトにとってかなり微妙なというか不利な形勢になってきているらしいです。さもありませんという感じでしょうか。

代理と象徴という仕組みは、確かに素晴らしい面を持っています。その半面で、この惑星に生息する他の生物や非生物に悪影響を及ぼす可能性がきわめて高くなってきたのではないかと感じています。そんな感じがしないでもありません。

どういうわけかヒトが獲得してしまった「何かの代わりに『その何か以外のもの』を

用いる。つまり、代用する」という仕組みは、その仕組みの応用編、あるいは進化した操作である仮定と比喻という仕組みだけでなく、もう一つ、やっかいなというか、恐ろしい仕組みというか習性につながっているらしいのです。

その習性にも、宇宙法廷は注目しているというのですが、ここで休憩に入りましょう。

(つづく)

宇宙法廷審理中——第3話

最初に、これまでのおさらいをしましょう。

昔々のお話です。

太陽系の惑星の一つである地球に生息する、うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんの脳内で、異変が起きたらしいのです。その異変を許容するかどうかをめぐって、宇宙法廷が審理を始めました。それが現在も続いているというお話なのです。

その審理の方法は以下のとおりです。

例の尻尾のないおサルさんの脳内で生じた異変が、地球に生息する他の生物と非生物にどのような影響を及ぼすか？ この問題を、ある種のコンピューターを用いてシミュレーションによって実験するという方法が取られているらしいのです。

法廷での審理は継続中ですが、漏れ聞くところによりますと、うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんが、どういうわけか獲得してしまった「何かの代わりに『その何か以外のもの』」を用いる。つまり、代用する」という「表象」または「象徴」という仕組みについては、以下のような問題点が指摘されているとのことでした。

その問題点は、シミュレーションの真っ只中に投げ込まれている形になっているヒトが体験的に感じ取っていると予想されます。さもなきゃ困りますよね。自らの問題点を意識していないとか、自覚していないとか、反省していないということになれば、いくらなんでも鈍すぎます。宇宙の笑いものにされてしまいます。

では、問題点を箇条書きにします。

1) ものやことの代わりに言葉が使われ、伝達される。これはコミュニケーションとか通信と呼ばれ、ヒト同士をつなぎ、結束させたり、争いを生むという状況を生んでいる。また、図書館とかアーカイブスとかコンテンツという形で、言葉が保存されることによって、ヒトが情報とか知識と呼んでいるものがどんどん溜まっていく。ヒトには「知は力なり」というキャッチフレーズがありますが、まさに言葉によってヒトは強大な力を地球で行使している、

2) ヒトは、代理と象徴という仕組みを基本とする、お金というものを使用している。お金は有形無形を問わずありとあらゆるものの代理として、グローバルな規模で流通している。事態は、地位や能力やスキルや権威や権力や腕力や武力までもお金で買えるところまでになっている。つまり、ヒトはお金のためなら、何でもするようになってしまった。

3) ヒトは、代理つまり象徴である言葉と、自らに備わっている想像力や空想力や妄想力とを組み合わせて、とほうもない野望をいだくようになった。これには仮定と比喻という、代理の仕組みの応用型が大きな役割を果たしている。簡単に言うと、「もしも〇〇だったら」と「△△みたい」を組み合わせて、さまざまな想像をし、実際にその想像を創造し、多種多様なものやことを発明してしまった。さらには、「△△のみたいに」の「△△」を「魔法」に変えてしまった。その結果、「もし魔法みたいに〇〇できたら」という思考を身に付けてしまい、とんでもない恐ろしいものまで想像し創造する力を備えてしまった。

以上の三つの憂えるべき問題点は、それぞれが地球に生息する他の生物や存在する他の非生物にまで悪影響を及ぼすほどのレベルに達している。

この三点だけを考慮に入れても、うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんの脳内での異変、つまり「何かの代わりに『その何か以外のもの』を用いる。つまり、代用する」という仕組みを獲得してしまった事件を許容することはきわめて困難である。宇宙法廷は、そうした結論に傾きつつあるらしい。そんな噂が、法廷外に漏れつつあるとのことだ。

宇宙法廷は、脳内で異変を起したうだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさん、つまりヒトに備わった、さらにもう一つの大きな問題点というか習性に注目をしているようなのです。その第四の問題点について、以下に述べてみたいと思います。

*

結論から申します。問題はテリトリー、縄張り、マーキング行動といった言葉で説明

可能なヒトの習性です。順を追って説明しましょう。この文章は日本語で書かれているので、日本語を母語とする人たちに分かりやすい方法で、この問題を論じてみます。

「知る・知っている」という言葉がありますね。それに相当する英語の know の語源には、せいぜい「知っている、知る、知らせる、知覚する」という意味しかありません。

一方、日本語の「知る」の場合には、かつては「しる・知る・領る」とも記述することができたらしい。つまり、何かを目にした時に、「これは全部、わたしのものだ。わたしに任せとき」と主張する、という意味だったようなのです。特に「領る」は意味深です。

駄洒落に聞こえるかもしれませんが、「しる・知る・領る」とは、「しる＝汁＝おしっこ」を引っ掛けるワンちゃんやネコちゃんなどの、マーキング行動＝テリトリー作り＝縄張り作りと同じ行動らしいのです。ただし、ヒトという種の場合には、ワンちゃんやネコちゃんなどの、やむを得ない本能という身の程の枠内での、慎ましくて自然な行動とは趣が異なっています。

ヒトのマーキング行動は、マジで怖い、常軌を逸した、過剰きわまる、もうビョーキとしか言うほかないレベルでの仁義なき戦いみたいなのです。しかも、そうした尋常ではない事態を、ヒトはあまり意識していない、危機意識がきわめて希薄であるようだ、と言えそうなんです。これって、かなりの、いや大問題ではないでしょうか。

この「マーキング行動＝テリトリー作り」と、「名前＝名付けること」は密接にかかわっていると考えられます。

ヒト以外の生物における縄張り作りはつつましく、空間的なものに限られます。一方、土地や物をめぐってのヒトと他の生き物との争いでは、圧倒的にヒトの勝ちです。

では、ヒト同士の縄張り作りの場合は、どうでしょう。エスカレートしますよね。規模が大きくなると、部族間、民族間、国家間、地域間の武力抗争になることは、みなさんご承知のとおりです。

ただし、ヒトの場合は、土地に線引きをするだけではありません。最も熾烈な縄張り争いが起こるのは、宗教と学問という分野です。

宗教の名の下に、戦いや裁判や迫害という形で、これまでヒト同士がどれだけの血を流してきたでしょうか。異なる宗教間だけではありません。同じ宗教の中での正統と異端との派閥争い、あるいは魔女裁判――。

ところで、ここで誤解を招かないように、お断りしておかなければならないことがあります。宇宙法廷は、ヒトにおける宗教全般を非難してはおりません。「あっそう、そんなことやっているんだ」くらいの受けとめ方をしているようです。それはさておき、本来の宗教の役目を逸脱した行為や側面を問題視しているらしいのです。

具体的には、お金儲けや、個人崇拜や、全体主義や、私生活への干渉や、政治への介

入や、差別や、支配体制保持や、階級制度保持や、ひな壇作りに、宗教が悪用されていることを指します（※悪用や利用は代理の仕組みの応用です）。

組織のトップ（※ヒトの空想の産物である「何かすごいもの＝超越的存在」の代理人を装っていたり、「何かすごいもの＝超越的存在」になりきっている、ただのヒトもいます）や幹部たちによって、一般信者たちが利用され搾取されている。そうした「代理・象徴の仕組み」の暴走に、宇宙法廷は重大な関心を寄せているようです。

一方、学問の世界での、派閥争いや「正しい対正しくない」の水掛け論も、すごいらしいですね。また、宗教と自然科学との間の争いもよく知られていますね。古いところでは、天動説と地動説。ちょっと古いところでは、米国でのサル裁判。現在も進行中である、進化論否定（※サル裁判の蒸し返し）、人工妊娠中絶反対、ヒトES細胞研究反対など――。

なぜ、ヒトES細胞研究が悪くて、核兵器の開発と使用がオーケーなのでしょう。各種のファンダメンタリストのみなさんたちに、お聞きしたいところです。宗教の悪用と流用ですから、まともな回答は期待できないと思いますけど。

ヒトという種の縄張り行動の場合には、テリトリーが、ワンちゃんやネコちゃんたちに見られる、「しる・汁」、つまり「おしっこ」をかけるという、慎ましい行動とは異なり、きわめて攻撃的＝暴力的であるだけでなく、大規模でかつ残虐なものになりがちである点に注目しなければなりません。ジハードやアルマゲドンという言葉思い出してください。ぞっとしませんか？ 現在、現実問題として、この二つと核兵器が結びつこうとしています。

ちなみに宇宙にも、宗教と学問に相当するものは多種多様な形態で存在しますが、それをヒトが理解できる言語に翻訳し説明することは不可能らしいです。また、宗教と学問が代理・象徴の仕組みとからむ形で、内部でのおよび外部との抗争に結びついたり、他の目的に代用される、つまり利用・悪用・流用される例はないようです。

どういう訳で、そうなっていないのでしょうかね。この駄文を書いているヒトの端くれである者にとっては、雲をつかむような話で、全然想像も妄想もできそうにありません。ヒトの場合には、単に過剰な欲と色気さえ捨てれば、新たな道が開けるのでしょうか。そんな簡単な話ではないのでしょうか。

いずれにせよ、宇宙法廷は、ヒトに見られる宗教と学問の転用および流用問題を、ヒト同士だけでなく、この惑星の他の生物および非生物に甚大な影響と被害を与える可能性が高いとみなし、重大な関心を寄せているとのこと。

*

ここで、以上のことをまとめてみましょう。

「地（ち）」→「知（ち）」→「血（ち）」

こんな具合にシンプルな図式になります。

ヒトは、土地や物を「しる・知る」、つまり「名付ける・名前を与える」ことによって「自分のものと主張する・縄張りを作る」。さらに、森羅万象を「しる・知る」。つまり「名付ける・名前を与える」ことによって「自分のものと主張する・縄張りを作る」。自分の土地をどんどん広げていく。自分の名付けたもの、つまり知識をどんどん蓄えていく。

そのためには、戦い、血を流さなければならない。これまでに、他の生き物に対してだけでなく、同じヒトという種同士の間で惨劇を数限りなく繰り返し、同じことが今もなお繰り返されていることは、みなさん、ご承知の通りです。

「知る」という一見、人畜無害で、時としては、「高尚＝高等ないとなみ」だと考えられている、ホモ・サピエンス（＝homo sapiens＝知恵・知性あるヒト）特有の行動が、無害どころかヒト同士のみならず、多種多様な生物と非生物を有する、母なるこの惑星にとって、きわめて有害であるらしいこともまた、みなさん、薄々お感じになっていらっしゃるのではないのでしょうか。

こういった事態と惨状を、自分自身も含めてのヒトという種のかかえている憂えるべき深刻な問題として提起することも可能かと存じます。

どうして、このような話をしているのかと申しますと、宇宙法廷においては、地球におけるヒトの繰り返し広げている「地（ち）」→「知（ち）」→「血（ち）」という連鎖が、かなり非難を浴びているもようだからであります。

*

サイエンス（science）の語源は、「知る・知ること」であり、かつては長きにわたって、現在のように細分化されるまえの「学問一般」や「体系化された知識の総体」、つまり、「知」を示す言葉であったと言われていました。「知」のなかには、いわゆる宗教・倫理・道徳も、いわゆる科学・工学・数学も含まれているはずですが。

「知る」＝「印（しるし）をつけて名付けること」は、ヒトにとって、自分を取り巻くごちゃごちゃぐちゃぐちゃした世界を「分ける・分かる」ことであったはずですが。

その「知ったもの＝名付けられたもの＝言葉として認識されたもの＝分けた・分かったもの」を「さらに知る＝さらに名付ける＝さらに言葉として認識する＝さらに分ける・分かる」という作業を、ヒトは延々と繰り返してきたのです。これからも、ヒトという

種が続く限りは、延々と繰り返すでしょう。

ヒトは後戻りはできないが、後を振り返ることならできる。せめて、そう信じたいです。

*

さて、ここで、ヒトの欲望の一つである普遍性への欲求について考えてみましょう。

この欲求は、実は、「自を守るために他を排除する行為」でもある点を忘れてはなりません。普遍性の類語とも言えるグローバル化や世界標準という言葉に、差別・対立・敵対・暴力・排斥・排除・根絶という言葉の匂いを感じ取ることが求められているようです。

共通性、汎用性、有効性という言葉においても事態は同じです。単純化すると、いわゆる選別と排除とは、「AではなくてBだ」と主張すること、または「Aを無くしてBを生かす」ことですね。この「AではなくてBだ」は、しばしばBを殺めるとか殲滅することの婉曲な言い方になります。つまり、実際には、ものすごく怖いんです。

「AでもありBでもある」と主張すること、あるいは「AとBの両方を生かす」ことも可能ではないのでしょうか。ばらばら、雑多、ああでもありこうでもある、灰色、曖昧、わけ分かんないでも、別に構わないのではないのでしょうか。

これは、普遍性や普遍的とは、異なる方向を向く行為かもしれません。いわゆる「知」とは、異なるものかもしれません。でも、可能ではないのでしょうか。言葉の遊びめいて恐縮ですが、本当に「分けないことには分からない」のでしょうか。

つまり、「分けない状態=ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」では、「分からない=知りえない」から駄目だと決めつけ、もっと知ろうと欲を出し頑張るべきなのではないのでしょうか。でも、五感によって知覚するしかない生き物であるヒトが、その知覚を超えることなどできるのでしょうか。

機械や計器を発明して、それで知覚の限界を補えばそれで済む問題なのではないのでしょうか。たとえば、精度のきわめていい計器を使用したところで、ヒトはその計器が出した値を五感で知覚するしかないようです。というか、ヒトの五感で知覚できるように、計器は作られているが正確な言い方でしょう。

いずれにせよ、そうやって知覚した値を、脳が情報処理できる範囲内で認識し判断したうえで、ヒトの習性という枠組みの中だけで行動するしかないみたいです。

となると、ヒトは身の程をわきまえるべきではないのでしょうか。

「すっきり」、「くっきり」、「明るい」、「分かる」が良くて、「ごちゃごちゃ」、「ぐちゃぐちゃ」、「ぼんやり」、「わけが分かんない」は良くないことなのでしょうか。後者でも、別に構わないのではない気がするのですけど。

それとも、両者の二者択一とは異なる「道＝手段＝やり方＝生き方」をさぐるべきなのでしょうか。そのあたりの可能性について、ヒトは積極的に考えてみるべきなのかもしれません。それとも、新たな脳内の「ズレ」とか「壊れ」が起こるのを、気長に待つしかないのでしょうか。

宇宙法廷でのヒトをめぐる審理について漏れ聞く情報から察するに、そんな感じがいたします。どうやら、「待った」をかけらそうな感じです。とにかく、このままでは駄目だということは、確かなようです。デッドエンド＝dead end＝行き詰まりですね。

じゃあ、この辺で休んでみたらどうでしょう。強迫観念に駆られて、焦ることも、急ぐこともなく、のんびりしませんか。まったをかけられるのなら、まったりしませんか。この駄文も、ここでいったん休憩いたします。

(つづく)

宇宙法廷審理中——第4話

昔々に始まったらしい、宇宙法廷における審理の行方については、その審理の対象となっている事件の当事者であるヒトが一番よく分かっているのではないか。そんな気がしてきました。

それにしても、心配です。ヒトの知覚能力および認識能力および道義心および補償能力の、欠如および限界を考慮し、「象徴」「代理」という仕組みは、ヒトには荷が重過ぎると判断されるのでしょうか。

その場合には、シミュレーションによる実験は中断されるのでしょうか。「待った」をかけられるのでしょうか。中断ということになれば、今「現実」だと知覚し認識しているものは、「夢」や「泡」としていきなり消えてしまうのでしょうか。

それとも、もう少し痛い目に遭わされてから、中断という措置を取られるのでしょうか。その結果、ヒトはうだつのあがらない種類の尻尾のないおサルに逆戻りするのでしょうか。それとも、「オーケー。問題なし。いけいけ」、なんてことになっちゃうのでしょうか。

法廷での審理の経過や結果をあれこれ心配するよりも、自分自身の言動を含む、周りの現状に目を向けてみましょう。

*

ヒトは地球のほとんどの土地と海洋を自分たちのものであると思い込んでいる（※他の生物にとっては不法占拠です）。

地球の温度が年毎に上昇している（※まさにヒトは地球に生息する他の生物と非生物の存続を脅かしていると言えます）。

地球上の全生物を何十回いや何百回も全滅できるだけの核兵器をヒトは保有し、その数は増えつつある（※同上）。

ヒトの人口は地球が許容できる以上に増え、さらに増え続けている（※同上）。

少数の豊かなヒトが生きるために大多数のヒトが命を縮めるか亡くなるというメカニズムが出来上がってしまった（※これって、ヒトが共食いをしている、あるいは仲間を見殺しにしている、と宇宙法廷では判断されそうです）。

真剣な顔をして、「生物多様性がですねえ……」（※何をいまさら……）。

ヒトは自分たちの脳が素晴らしいと思込み始めている（※この究極のナルシズムが今出版界でブームですね）。

これからはナノテク、バイオテクノロジー、量子の時代だと張り切っています（※らっきょうの皮むきと同じで、切りがありませんね。その前にすることが、たくさんありそうなのですけど）。

数学が美しいと思うヒトたちがいる（※蜃気楼と同じで錯覚は美しいからかもしれません。それとも、あばたもえくぼですか）。

地図（＝象徴・情報・信号）を現地（＝現物＝現実＝事実）だと勘違いしているヒトた

ちがいる（※えっ、違うんですかと言いきなりになりました）。

お金が欲しくてたまらないヒトたちがいる（※自分も欲しいです）。

自然科学に対する飽くことを知らない探究心は今後も続くのでしょうか（※いくらヒトの知覚能力を超えた機械や計器を作り出したところで、その作動結果はしょせん五感でしか知覚できないのに、未だにもっと「分かりたい」とか、もっと「知りたい」みたいです）。

そう言えば、大部分の生き物には、発情期や繁殖期が存在しますが、ヒトは年がら年中発情している例外的な生き物らしいですね。年中無休。一年三六五日フル稼働中。出血大サービス。絶倫。（※だから、いろいろな意味で色気がありすぎるのでしょうか）。

*

以上のような状況を考えると、

宇宙法廷が審理中だという事件——うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんの脳内で異変が起き、どういうわけか「何かの代わりに『その何か以外のもの』を用いる。つまり、代用する」という「表象」または「象徴」という仕組みを獲得してしまった——の危険性

を、一種のコンピューターを用いてシミュレーションという形で実験するという試みの結果は、目に見えている感じがします。

ぶっちゃけた話、アウトでしょう。あとは、この事件を許容し放置するかしないかという問題です。「まあ、いろいろあるけど仕方ないな、ほっとけ」か、「ほかの生き物がかわいそうだ。やばいから阻止しよう」か、という意味です。万が一許容されるとするならば、ある一定の条件付きということになりそうです。

その条件とは、ヒトには「心の問題」として認識されるたぐいのものではないでしょうか。前回触れましたテリトリー作り、つまり縄張り作りという、ヒトのみならず大部分の生き物に見られる習性について再度考えてみましょう。

*

テリトリーには「居心地のいい内部」がある一方で、居心地がいいどころか、気を緩めることのできない、「境=辺境=フロンティア」もあります。ちなみに、生物のマーキング行動=縄張り行動における「印= mark」という英語の語源は、「境界・境界の印・国境地方」だとのこと。

境界とは、外部との接点ですから、「他者=よそ者=外敵」が、いつ自分（or 自分たち）のテリトリーに侵入してくるか分かりません。常に外に目を向けて、警戒をしなければならない場所です。

「自分のテリトリー=専門（or 専門分野）を侵された」という言い方があります。学問・学者・研究者の世界、官僚・役人・族議員の世界、職業または職能集団、宗教組織または組織内の派閥、ある共通項を持ったヒトたちが漠然と成している国家や地域や共同体や社会や領域や業界や集団——こうしたテリトリーは、常に他者から「侵される」という恐怖心を潜在的あるいは顕在的にいんでいます。

要するに「侵される=犯される=冒される」のが怖い。ビビりまくっている。だから、攻撃的になる。その結果として、先手を打って「侵す=犯す=冒す」こともある。

*

「しる=汁=おしっこ」をかけて、その場所を「知る」ことにより、自分の縄張り=テリトリーとするマーキング行動——。これは、ワンちゃんやネコちゃんや他の生き物たちの行動だけでなく、ヒトにもある。と言うより、むしろヒトが最もエスカレートした大規模なマーキング行動を行っていると言えそうです。

ヒトは、名付けることにより、「しる=知る=知（ち）=知識」を得て、おびただしい量の「血（ち）」を流すことにより、「テラ=地（ち）=大地=地球」をいわば「テラ取り」して、テリトリーを拡大してきたと言えそうです。

しるしるちしる、しるかけて、つばつける。

そんな「おまじない=お呪い=悪マジ無い」を、どこかのアホが叫んでいたと聞きました。【本書に収録されている『テラ取り物語』をご参照ください。】

知る領る地知る

知る知る知知る

知る領る血知る
知る知る血知る
知る痴る血汁

何度読んでも、恐ろしいおまじないですね。

さて、ヒトの場合には、「知る=知る=知(ち)=知識」がありますから、話は非常にややこしくなります。この惑星の「土地の独占=地の独占」という物理的なレベルにとどまらず、「知識の独占=知の独占」もしたという錯覚に陥っているようなのです。

その錯覚の根底にあるのは、

名付ける → 言葉を作る → 言葉を「事・物・現象=森羅万象」に与える → 言葉で森羅万象を詳細に分ける=分類する → 森羅万象が分かった=理解したという錯覚に陥る → 森羅万象を支配=征服したと思いたがる、あるいは思い込む

という、図式ではないかと思えます。

以上の図式を前提とするなら、そうしたプロセスが、この惑星に生息するヒトのさまざまなグループによって実行されてきたということになります。

すごいと言えばすごい。恐ろしいと言えばおそろしい。大したものと言えば大したもの。邪悪なことだと言えば邪悪なことである。このように、名付け、つまり、言葉を用いれば何とでも言える。そこが、言葉の最も重要な特性です。

すると、当たり前のが起きます。

*

いろいろなヒトが、いろいろな「名付け=言葉」を使う事態となります。

「シーニュ？ いや、記号」「表象？ いや、象徴」「意識？ いや、自我」「幻想？ いや、現実」「錯覚？ いや、悟り」「迷妄？ いや、科学」「同性愛？ いや、ゲイ」「聾？ いや、ろう」「神々？ いや、神」「妖精？ いや、霊」「しんのすけ？ いや、おら」「オーラ？ いや、引き寄せ」

「引き寄せ、いや、引きつけ癒の虫」「飴草飼郎の生まれ変わり、いや、ドクダミの生まれ

変わり」「茶坊主の生まれ変わり？ いや、チャバネゴキブリの生まれ変わり」「気づき？
いや、まなび」「かずよちゃん？ いや、リカちゃん」「これからは量子？ いや、その次は
〇子」「分ける？ いや、分けない」

「詐欺？ いや、投資」、 「ばくち？ いや、投機」、 「殺害？ いや、処分」、 「消えるの？ いや、
生まれ変わるの」、 「波？ いや、波動」、 「悦ばしき学問？ いや、悦ばしき知識」、 「Haruki
Murakami ? いや、Murakami Haruki」、 「税金？ いや、血税」、 「公僕？ いや、公務員」、
「国策？ いや、独立」、 「狙い撃ち捜査？ いや、たまたま捜査」

「給付金？ いや、税金」、 「国債？ いや、借金」、 「強制？ いや、自粛」、 「国民？ いや、庶
民」、 「数十万人？ いや、数千人」、 「もうたくとう？ いや、マオ・ツォートン」、 「虐待？
いや、しつけ」、 「加害者？ いや、被害者」、 「民主主義人民共和国？ いや、ならずもの国
家」、 「異常？ いや、正常」

「過激派？ いや、英雄」、 「侵略？ いや、保護」、 「盗難品？ いや、博物館の展示品」、 「患
者？ いや、健康体」、 「ヒト？ いや、ニンゲン様」、 「文科省管轄？ いや、厚労省管轄」、
「毒？ いや、薬」、 「やばい？ いや、大丈夫」、 「おしまい？ いや、はじまり」、 「もういい
よ？ いや、まあだだよ」……。

もめるのは当然でしょうね。ヒトは言葉に命をかけているのが、普通ですから、やすやすと相手に譲ったり妥協したり中をとったりなんてことは、容易にはしないと思われま
す。「徹底抗戦＝仁義なき戦い」をするでしょう。ワンちゃんやネコちゃんやスズメちゃ
んやヒラメちゃんたちのテリトリー争いとは、規模もマジ度も違います。

で、動物行動学＝エソロジーなど知らない素人の浅知恵として、勝手に勘で決めつけ
て考えていることなのですが、ヒト以外の生物のマーキング行動＝縄張り行動は、

『『ここまで』が、わたしのテリトリーだ』という印をつける行為であるのに対し、ヒトの
場合には『『ここから』あるいは『ここを中心に』まわり全部が、わたしのテリトリーだ』

と主張しているように感じられるのです。

うちのネコ（※うちの猫の名前です）やほかのネコちゃんたちの行動や、近所で見か
けるワンちゃんのおしっこをする仕草を見ていると、「ここまで」という印象をいただきます。
「ここまで」という線＝境界線を引いているという感じです。

でも、ヒトはどうでしょう？

ヒトの「知る（※広辞苑によると『領（し）る』と同源とあります）」、つまりマーキング行動は、「ここから」「ここを中心に」辺り全部という面積を示しているような気がしてなりません。自分もヒトの端くれですが、自分の言動を反省しても、そう思います。他人様の言行を拝見しても、そう思えます。

言い換えると、ヒトのマーキング行動＝縄張り行動の特徴は、

「ここ＝名付けた地点」が中心で、これから先は拡大していくという印（しるし）を付けることである。

という印象が強いのです。印象ですから、きわめて個人的な見解ですけど。

*

で、いったん出来上がったヒトのテリトリーが正方形なのか、長方形なのか、円形なのか、楕円形なのか、すごくいびつな形なのか知りませんが、とにかく中心にあったものを、「縁（へり）＝辺境＝境」近くにまで移動させるとします。すると、「安定している＝有効である」と思い込んでいたものが、きわめて「不安定である＝有効性が疑われる」ものになるという事態が発生します。

なぜなら、「辺境＝境」とは、「他者＝よそ者」と「出会う＝遭遇する＝触れ合う＝衝突する」可能性が強い場であるからです。「辺境＝境」とは、「他者＝よそ者」による「名付け＝言葉」と接触する場であるとも言えるでしょう。

結局、話は「言葉の問題＝言葉という問題」になってしまいます。言葉である以上、当たり前なのですが、「思い込み＝錯覚」ほど処置に困るものはありません。というか、言葉を使用すること自体が、そもそも「何かの代わりに『その何かではないもの』を用いる」という錯覚を利用した「約束事＝ルール＝お遊び＝遊戯＝ゲーム」であったはず

です。
その当たり前のことを、ヒトはすっかり忘れてしまうのです。理屈や屁理屈で言って聞かせても、聞きません＝効きません＝利きません。

言葉という代理・象徴の仕組みの基本は、一対一対応などではない。言葉という「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」を場として、多数の対応物同士が「またがる＝かぶる＝ダブる＝ああでもありこうでもあることもある&ああでもないしこうでもないこともある」。

だから、「わたしのもの=テリトリー」なんて主張するのは無理なんです、

なんて言っても、聞く耳を持ちません。

「わたしがこう決めたら（=名付けたら）、こうなの。それ以外は、でたらめ」

という感じです。もうお手上げです。勝手にしてください、としか言うべき言葉はありません。

話は元に戻ります。

*

今は昔。昔は今。

昔々のお話です。

宇宙である裁判が行われました。ただ今、行われました、と過去のことのように書きましたが、実はこの裁判は現在も続けられているのです。つまり、事件は宇宙法廷で審理中なのです。

どうやら事件はこの惑星が舞台であると言いますか、地球で起こりつつある状況が、裁判での判決を左右するようなのです。

長い長い裁判です。でも、宇宙という時空のレベルから見た場合には、ほんの一瞬とも言えそうです。

このように、話が宇宙規模になりますと、この惑星に住む生き物たちや、自らをこの惑星の支配者だと決めこんでいるヒト、つまりホモ・サピエンスと自らに尊称を与えている尻尾のないおサルさんにとっては、事件の経過とその審理期間は計り知れない長いものとなります。

また、宇宙法廷ともなりますと、ヒトが用いている言語や貨幣に代表される、表象とか象徴と呼ばれる仕組み以外の多様な仕組みを基盤とする認識や伝達の形式と手段が使用されていますので、非常にややこしい話となります。

こうしたややこしい話は、理屈よりも、比喩つまりたとえることで、暗示するとかほのめかす以外に、語る方法はないと思われれます。というわけで、このお話は、きわめてややこしく込み入った裁判のお話を、この惑星を牛耳っているつもりホモ・サピエン

スの認識形式である象徴という仕組みにのっって語る以外に、みなさんにお伝える方法がありません。

以上のことを頭に入れたうえで、お話を聞いていただければと存じます。

えっ？「偉そうなことを言っているけど、お前はいったい何者なんだ？」ですか？

代理人の端くれだとだけ、お答えしておきます。そうです、単なる代理です。それ以外に考えられますか？ さもなきや、べらべらべらべらと、こんな与太話を口にすることはできません。

えっ？「何の代理だ？」ですか？

分かりません。代理の仕組みを使用する限り、分からないようにできているのです。代理の仕組みは、らっきょうやキャベツと同じで、むいてもむいても中身は結局不明なのです。だから、この仕組みが審理されているのでしょうか。たぶん。

【後記

本編をもちまして、「宇宙法廷審理中」は完結いたしました。なお、審理の経過につきましてはさまざまな噂を耳にしておりますが、実際のところは不明でございます。わが胸に手を置く以外になさそうです。

瞑目。反省。合掌。】

PDSジェネレーションズ

PDSジェネレーションズ——XYZ

殴るのは気持ちがよかった。ナカタニ・ナナセは弟のシータを完全に組み伏せた。シータの顔は紅潮し、さっきナナセがつま先で蹴った顎の一部が黒ずんで、あざになりかけている。シータは、まんざらでもなさそうな表情をしている。

取っ組み合いの喧嘩は、痛くて苦しいのは事実だが、それよりも快感のほうがはるかに勝る。

どうして、こんなに気持ちのいいことが許されないのだろう——。ナナセは思う。今度は、少しシータに反撃させてやろう。たまには、ぶたれてみたい。そう思って両腕の力をゆるめた瞬間に、ベルトに装着されたポーチからメロディーが発せられた。二〇三〇年代に流行した歌の旋律だという。

「あのころは、反戦歌だったんだ——」

このメロディーを聞くたびに母方の祖父が口にする言葉を思い出して、ナナセは顔をしかめた。あのおじいちゃんの目つきは気味が悪い。

曲の音は次第に大きくなっていく。ナナセとシータは、床から起き上がり、それぞれの腰に付けたられたポーチから、ビニール袋を取り出しジッパーを開けて、中に入っているオレンジ色の飴玉を一粒ほお張った。

人工甘味料独特のきつい甘さが、口いっぱい広がる。ナナセは、シータの視線が泳ぎ始めているのを見つめる。一歳しか変わらないのに弟は、自分よりはるかに薬に弱い。母親に体質が似ているのだ、と医師をしている父親は言う。メロディーが静まっていく。それにつれて脱力感が強まる。どうでもいいや——。

*

勤務先のジュニアから帰宅したナカタニ・アカツキは、息子のシータの顎のあざを見ても、何も言う気にならなかった。ジュニアでは、娘のナナセより二、三歳年上の児童が中心の五年生のクラスを受け持っている。子どもたちを相手にした七時間あまりの労働を終えたのち、さらに一時間の教員会議に出席した。

ただ横になりたかった。眠るわけにはいかないことは分かっている。食事の準備をし、ナナセとシータの世話もしなければならない。今夜は夫が夜勤であることが、せめてもの救いだった。

居間のソファに腰を下ろし、アカツキは頓服のアップーを飲もうかどうか迷う。

「最近のアップーは、工場によってかなり粗悪なものも出回っているから、できるだけ頼らないほうがいい。毎食後の抗うつ剤と抗不安薬だけで我慢するように」

病院に勤務する夫のユージは、そう言う。夫の意見に従おうか、それよりも、このむなしさから一時的に解放されるほうを選ぶか。面倒だ。このまま消えてしまいたい――。

「お母さん、宿題手伝ってよ」

ナナセの声で、アカツキは目を覚ました。時計を見ると、十分ほど居眠りをしていたようだ。

「算数の問題で、ちょっとだけ分かんないところがあるの」

「ぼくの算数も見てくれる？」

「はいはい。家に帰っても、また授業ですね」

アカツキは懸命に笑顔を作り、アッパーを飲むためにキッチンへと向かった。

*

「去年の平均寿命が発表された。男性が六二・九四年、女性が六五・五二年。男女とも五年連続の低下。ほかのスポットの数値が出そろっていないから、明言はできないが、ニュー・カワサキが下位二十パーセント入るのは確実のもようだって――」

同僚の医師が、医師用ネットに流れるニュースを要約した。

ナカタニ・ユージは、ラップトップのキーボードから手を離して顔を上げた。斜め向かいのデスクにいる同僚の、灰色がかった薄いブルーの目を見つめる。同僚と同じくロシア系の女性患者の目を思い出した。妻のアカツキとのセックスレスの状態は、半年以上続いている。

三十四歳のユージは、七歳年上の女性と結婚したことを後悔しかけていた。同僚がげげんな顔つきになっているのに気づき、「君の家のXジェネレーションには、最近、異状はない？」と思いつきを口にした。

「凶暴性のほうは監視装置と薬で抑制できているが、放射能の被爆対策がうまくいっていない。カプセルはまあまあなんだけど、午前午後二回の光線のシャワー、あれがうちの娘の体質に合わないんだ。ものすごく肌が荒れてね」

「おやじに紹介させた会社の装置はどうだった？」と言い、ユージは同僚のデスクに近づいた。

「ごめん。礼を言うのを忘れていた。あの時はありがとう。感謝している。あの会社の製品を使ってはみたんだが、残念ながら著しい改善は見られなかった」

「行政府は？」

そう言って、ユージは医師用のネットのモニターを覗き込んだ。

ニュースのトピックが変わった。ニュー・カワサキからわずか数百キロ離れたスポットである、シンゲンからのレポートだ。ユージは見出しを読んだ。全住民の体内に埋め込まれている、電子チップの安全性に関する論文の概要が発表された、とある。

「この行政府が頼りにならないのは、おれたちが一番よく知っているじゃないか――」咳払いを一つし、同僚は声をひそめた。「そもそも、これだけ薬漬け器械漬けにされていれば、長生きできるわけないよな。われわれYジェネレーションとしては、Xジェネレー

ションのわが子の行く末を憂い、放射能をこの惑星に撒き散らしたエロZジェネレーションと、その前の歴代のジェネレーションを呪うしかないってことだ」

同僚の声を聞きながら、ユージは無意識のうちに左手で握りこぶしを作り、腕時計をにらんだ。宿直時間が終わるまでには、まだ三時間半もある。自分の体内に埋め込まれた電子チップが発している微量の電波が、腕時計の文字盤の裏に内蔵された極少の器械に、ブルーの筋となって吸い込まれていくのが見えるような気がした。

*

「――すみません。申し訳ございません」

サカモト・リョウは、ニュー・カワサキの治安組織であるポリースの取調室で、何度も同じ言葉を繰り返していた。

「つい誘惑に負けて、薬を飲まなかったのです」

「はい、よくできましたね、おじいちゃん」からかう口ぶりで捜査官が言った。「それだけを、検事と裁判官の前で繰り返してくれればいいんだ。少し休もう」と、事務的な口調に戻る。

捜査官は、カメラの死角の壁にもたれて居眠りをしていたもう一人の捜査官の肩を揺すり、一緒に取調室から出て行った。

十分ほど前によく薬を飲むのを許されたリョウは、いつもの落ち着きを取りもどしつつあった。自分がビデオの前で供述し署名したことの意味についても、あらためて考える心の余裕ができてきた。

六十六歳になったばかりのリョウは、ニュー・カワサキではかなりの高齢者だ。Zジェネレーションに属してはいるものの、核兵器が使用された最後の戦争中に子どもだった者たちに対する世間の目は、比較的寛大だ。

薬剤が効き出し次第に明晰になっていく頭で、リョウは世の中について、そして自分の置かれた今の立場について考え始めた――。

二〇八五年。世界政府の役割を果たしているソリダリティの推定では、世界の人口は五億人弱に激減したという。放射能に汚染された地域が多いために、特定の少数の地域に人口が密集している。放射能を出来る限り除去した、そうした地域はスポットと呼ばれている。

世界各地に散らばっているスポットの間を、放射能を遮断する金属で防備された小型ジェット機で移動することだけが、幾たびかの大戦を生き延びた人々にとっての人的交流である。あとは人工衛星を介しての無線のネットとわずかに残されているケーブルを利用してのネットが、スポット同士をつないでいる。

「とんでもない世界になったことは確かだ」リョウはつぶやいた。「とんでもない話だ」

リョウの思いは、監視カメラ付きの取調室に取り残されている自分へと向かった。行政政府によって無料で支給され、一日三回の服用を義務づけられているイエローのカプセル。あれを飲まないでいるときの、甘美で淫らな夢想。若かったころを思い出させる、ぞくぞくする快感。自分はそれに負けた。だが――。

「わたしは、犠牲者だ。こんな体になったのは自分のせいではない」

二〇三〇年代半ばから頻発し始め、長々と続いた数々の紛争。おびただしい数の大小の核兵器が使用された。放射能のせいなのかどうかは、まだ結論が出ていないようだが、どうやら人類の脳と身体に大きな異変が起きたらしい。

Xジェネレーションと呼ばれる、零歳からほぼ二十歳の人類には、凶暴性と残酷性が顕著に観察される。Yジェネレーションと呼ばれる、二十歳前後から四十歳くらいまでの人類には、うつや躁といった気分障害がみられる。Zジェネレーションと呼ばれる、四十歳を過ぎた人類の間では、著しい小児性愛の傾向が症候として報告されている。説明のつかない、そうした現象が世界的規模で起きている。

言語獲得以来の人類の大異変だと騒ぐ学者たちもいれば、天罰だとわめく宗教家たちが多数いるのは、リョウも知っている。

「天罰？ 罰？ そうだ、大変なことを忘れていた」

リョウは震えた。XYZの各ジェネレーションに対し、ニュー・カワサキの行政政府は、意図的な薬剤の中断に対して重罪を課すことで世界中に知られている。スパルタン・スポット――古代ギリシャの時代に厳格な規律と教育で知られた都市国家にちなんで、ニュー・カワサキはそう呼ばれている。

世界の男女の平均寿命が六十五歳を切ろうとしているらしいことは聞いている。六十六歳の自分が、寛大に見られていることも日々感じている。しかし――。

「息子を呼んでくれ」リョウは、天井に備え付けられた監視カメラに向かって叫んだ。「息子と連絡を取りたい。息子の勤め先は、医療管理センターだ」

*

ユージは、自宅の書斎にいた。三時間前に、携帯電話を使って実父のナカタニ・ユウマと話をした。自分の孫と同じくらいの子どもにいたずらをしたために、ポリースに身柄を拘束された義父に対して、特別な配慮を依頼するという内容だった。

ユージの知る限り、いくら高齢者であっても、あの法律を犯した者は刑を免れることはできない。年齢を考慮して、せいぜい禁固十年というところか。六十五歳を過ぎた義父にとっては終身刑と同じだ。

実父は、ニュー・カワサキで行政官を務めていた元高級官僚である。

「時間をくれ。二時間ほどで返事をする」と、ユウマは言った。

いつもなら、たいていの問題は短時間で解決してくれる。今回の件は、そうとう難航しているようだ、ユージは想像する。

知らせを聞いてショックを受けた妻のアカツキには、ユージ自らが強めの鎮静剤の注射を打った。七時間は眠り続けるだろう。それにしても、やっかいな問題を起してくれたものだ――。ユージは、じりじりしながらユウマからの電話を待った。

*

三日後――。

サカモト・リョウは、監視態勢の厳しい老人向け施設に入所することになった。

「ありがとう」

施設にリョウを預け入れた日、帰りの車の中でアカツキはユージに言った。

「ごめん。あれが自分に出来る精一杯のことだ、と親父は言うんだ」

「あなたのお父様には感謝しています。プリズンに入れられて当然の罪を犯したんですもの。あの年をして、みっともない。恥知らず――」

そう言って、助手席にいるアカツキが、ペットボトル入りのミネラルウォーターに口を一気に飲み干した。喉が渇くのは薬漬けのためだ。自分が妻に安易に薬を与え続けていることに、ユージは不安を抱く。そのうち、肝臓がやられるだろう。そして脳にも――。「あのお年だから、仕方ないとも言える」ユージは妻と義父に対する配慮の言葉を忘れない。「親父も、現在の行政府への対応には、かなり苦慮したそうさ。先の選挙で政権が変わったために、以前のようにはいかなくなると嘆いている」

「わたし、今度の政権は嫌い。悪い噂をよく聞くわ」

「薬剤の意図的な飲み忘れに対する罰則も、そうとう強化されているらしい。背景には、Xジェネレーションの問題がある。ぼくも、医療の現場から入ってくるいろいろな情報や噂を聞いている。これは、口外しないでもらいたいが、薬がだんだん効かなくなってきた。成長ホルモンとの関係が有力視されているが、それだけではないようだ」

「本当？ それって、ナナセやシータにも関係あることなの？」

アカツキは、新しいミネラルウォーターの栓をひねって開けた。

「いずれにせよ、原因究明より、薬の成分を変えるなどの手段での対処法の確立が急務になっている。ただし、量を増やせばいいというものではない。実際、過剰服用による犠牲が出てきている」

ミネラルウォーターのボトルが助手席の床に落ちた。とくとくと中身が外に出て行く。アカツキはボトルを拾おうともしない。目がうつろだ。

「アカツキ、顔色が悪いぞ。ちょっと、その先で車を止めよう。注射を打ったほうがいい」

ユージは、振り返って後部座席を覗き、医療器具を入れた鞆があるのを確かめた。

「やっぱり天罰だわ」

リョウがポリースに逮捕されて以来、アカツキの抑うつ状態は悪化している。うつ以外の兆候も見られるようになった。ユージ自身も、このところ自分が薬を摂りすぎているのを危惧している。原因の一つが妻であることは承知している。

アカツキは、終末論を唱える新興宗教に入っている。ユージは、実父のユウマとの電話での会話を思い出した。昨日、ユウマは電話越しにこう言った。

『——新政権は、前政権とは比べものにならないほど強権的だ。思想と宗教を含む言論に対する規制も強まると、私は見ている。宗教組織への別件による逮捕が近日中に計画されているという噂を、きょう聞いた。アカツキの入会している団体、あれは特に危ない』

ユージはゆっくりとブレーキを踏んだ。対向車もなく、背後にも車が迫ってはいない。「天罰だわ。教祖様のおっしゃる通り——」

助手席に目をやると、いつの間にか数珠を手にしたアカツキが珠を数えている。ユージは車を路肩に止めた。

「誰も悪くはない。悪くした人たちは、この惑星にはもういない」

ユージは、妻に聞こえないくらいの声でささやいた。

(つづく)

PDS ジェネレーションズ——PDS

「わたしたち、シンゲンに帰れるのかなあ？」

「帰れるって。保護するとか言いながら、ここのやつらは、おれたちを、すぐにでも送り返したがるのに決まってるさ」

「そうだよね。もうじき帰れるよね。ケンも一緒に帰れるよね」

「また、彼氏の心配か？ いくらここの医療管理センターに働いている伯父さんがいるといっても、ケンだけホテルにいない方がいいのは不公平っていうもんだ。やっぱり、あいつの親父の力だな」

「これからの時代は、医者にならなきゃ、いいことなしていうことだ。いつもの結論——。まさか、あいつだけシンゲンに帰っているなんてこと、ないだろうな」

「嫌よ、そんなの」

「大丈夫。おれたち、絶対に近いうちに帰れるって」

シンゲンからニュー・カワサキに修学旅行中の生徒たちが、ホテルのレストランで食事をしながら小声で話し合っている。

「おまえたちの考えは浅いよ。よく考えてみろ。おれたち、六日間も、このホテルに閉じ込められているんだぜ。帰すわけにもいかないほど、事態は悪化しているってわけだ。今回のインフルエンザは、前回よりはるかに強力だってことだ。ソリダリティあたりが、人道的問題だとか言って、きつとここの行政府に口出ししてるんだ——」

「しーっ。声が大きい」

「盗聴なんて気にしてられるか。それにしても、ニュー・カワサキって、嫌なスポットだよな。親父が言ってた通りだ。ここの医療管理センターは、世界一。シンゲンと違って、警察、軍隊、医療施設、行政の全部が一体化されてんだって。政権が変わってから、このスポットは何だか要塞都市みたいになってきたらしい。おれたちが、最後のお客さんかも——。話によると、医療管理センターの機能が肥大化して、事実上の行政府になってしまった。全部、親父の意見だけだよ」

「ソリダリティも、世界政府として、ここの行政府の独走には手を焼いているみたい。これはわたしのパパの意見」

「自称世界政府だろ？ シンゲンだって、世界政府だなんて認めていないじゃないか。まして、この要塞都市が——」

「ほら、やっぱり盗み聞きされてるよ」

十七人の生徒たちが、五台のテーブルに分散しているところに、アテンダントと呼ばれている、ニュー・カワサキのスポット民の男たちが三人やってきた。シンゲンから付き添ってきた教師と入れ替わりに、六日前から生徒たちの世話をしている。

「みなさん、そろそろシャワーのお時間です」

言葉遣いや物腰は柔らかいが、三人とも体が大きく、肌にぴったりとくっつく素材の上下を着ている。屈強そうな盛り上がった筋肉が透けて見えるようだ。動きもきびきびしている。

こいつらは兵士だ——。

生徒のひとりと思う。シンゲンに比べて、ニュー・カワサキの残留放射能の量は高いと聞いている。被爆の被害を抑制するための機器を腰に付けたポーチに収め、やはり放射能対策のための光線シャワーを一日数回浴びなければならない点では、シンゲンと変わるところはない。

それにしても、このニュー・カワサキというスポットはどこか変だ。早く、シンゲンに帰りたい。修学旅行中に、いきなりニュースに接することができなくなった。それ以後、事実上の監禁状態にされている。ホテルのテレビでは、映画とスポーツ中継ばかりが流れている。ネットの使用が禁止というのも変だ。何が起きているのだろう——。

「どうしたの、アルーン君。元気ないね」

一度も口を利いたことのないアテンダントから、いきなり名前を呼ばれたその生徒は、小さく身震いした。

*

「馬鹿言うなよ。PDSはPDSじゃないか。『パーソナリティ・ディスオーダー・シンドローム』、つまり『人格障害症候群』、立派な医学用語だろ。それにジェネレーションズをつけて、PDSジェネレーションズってメディアが使い始めたのは、ずいぶん前の話。素人だから不正確な使い方をしているのは認めるけど、その言葉を自粛しろだって？ はっきり言って、言論統制じゃないか」

中国系の同僚が、憤った表情でナカタニ・ユージに言う。

「だから、当然のことながら、Xジェネレーション、Yジェネレーション、Zジェネレーションも使用自粛というわけだ」

「自粛じゃなくて禁止。こういう芽は早めに摘まないと、言論弾圧にまで発展する。全体主義は、子どもたちと言葉から手を染める。そんな意味のことが何かに書いてあったのを思い出す」

「その全体主義って言葉も、危ないな。この施設内での盗聴の噂を聞いちゃだろ。自宅だって、どうなっていることやら。新政権による医療関係者への監視と締め付けは異常だよ。ぼくは、もう半分、諦めているけど――」

そう言うユージの口ぶりは、自嘲に満ちていた。抗うつ剤、抗不安薬、鎮静剤と、それらの薬の副作用を抑えるための薬。放射能による被爆を抑制するための複数の薬剤と器機類。そうした人工物に頼り、率先してスポット民を支えなければならない、働き盛りのYジェネレーション。

うつ状態と躁状態が交互に表れたり、躁が常態化している者も一部いるが、抑うつに苦しむ者が圧倒的に多い。

ユージは、医療の現場を離れ、現在の部署に回されたばかりだ。医療管理センターでは、大規模な機構改革が行われつつある。そのため、行政府の思惑についての憶測が飛びかう。

行政の社会政策遂行の中で、医療をどのようにして効果的に機能させるか――。それを調査し研究するのが、ユージに与えられたセンター内での新しい任務だった。

「薬が効かなくなってきたXジェネレーションの問題に加えて、今度はインフルエンザか」口を挟んだのは、韓国系の同僚だった。「エンデミックからパンデミックという流れは、もうメディアがリークしている。メディアも捨てたものじゃないな。ネズミも時にはネコを噛むってことか。いや、そろそろネコは、ライオンへと昇格かな。ライオン、瀕死の虎シンゲンに牙をむく――」

「おい、その話はやめろ」

ユージは声を抑えながらも断固とした口調で仲間に忠告した。

シンゲンからの情報は乏しい。

住民の五十から七十パーセント以上が新型インフルエンザに感染し、死者が続出しているらしい――。ユージは、数日前に聞いた話を思い出す。

シンゲンから最も近いスポットであるニュー・カワサキは、ソリダリティやほかのスポットの非難を尻目に、シンゲンを「隔離」することに最も積極的な姿勢を示している。シンゲンとの間のケーブルによる通信回線を切断し、人工衛星を介しての無線に対して、

局地的な妨害電波を送っているという噂も、世界では半ば公然の秘密となっている。

オフィスの仕切りの向こうで、医療監視センター専用ネットのモニターを見守っていた、ブラジル系の同僚が立ち上がった。顔が青ざめている。両手を大きく広げ、首を左右に振り続けている。

今度は何が起こったのだ？

ユーヅを含めた三人の職員が、モニターのあるデスクに駆け寄る。

*

ナカタニ・アカツキは、居間で液晶の大画面を見ていた。ソファの傍らのカーペットの上では、娘のナナセと息子のシータが、仲よく並んで寝そべり居眠りをしている。一日の大半を子どもたちが半睡半醒の状態であるのを目にしても、アカツキは何も感じなくなってきた。

古い映像だった――。

アカツキは画面を見つめる。地球温暖化、環境破壊、二酸化炭素排出量取引、大量飢餓、貧富の格差、市場経済の終えん、文明の衝突、ジハード、アルマゲドン、核兵器の拡散、サイバーテロ、化学兵器、生物兵器、ジェノサイド、IT、バイオテクノロジー、ナノテクノロジーといった言葉が、ナレーションに混じる。

どれもがアカツキの耳には空疎に響く。現在の世界を思うと、ぴんと来ない――。

最近のアカツキは歴史に興味を覚え、ネットを通じて二十一世紀のドキュメンタリー・コンテンツばかりを見ている。以前に熱中していた宗教には、もう興味が持てない。教祖は依然として行方不明のまま。どこでどんなふうにして人類が足を踏み外したのかを、冷静に考えてみたい。そうした思いに駆られていた。

今は、二十一世紀の初めの世界情勢についてのコンテンツを漁っている。のどかな時期だったと思う。現在に比べれば、誰もが生き生きとした表情をしている。それでも、ときおり混じる当時の人たちの話す口からは、苦しいとか不安という言葉が聞かれるが、現実味はまったく感じられない。

シータが目を覚ました。

「おしっこ」と言い、ゆっくりとした足取りでバスルームに向かう。

「ひとりでできる？」アカツキは声を掛けた。

「わたしも行く」

知らない間にナナセが立っていて、弟の後をやはり緩慢な動作でついていく。八歳と九歳とは思えない。幼児返りの兆候が見られる。宿題を手伝ってくれと頼まれることは、もうないのだろうか、とアカツキは考える。

ジュニアでの教員を辞めて以来、アカツキは、自分の娘と息子以外に子どもたちに接することはない。かつて教えていた児童たちの顔が頭に浮かぶ。どのジュニアも、現在では休校状態だという。児童と生徒たちの消えた校舎、体育館、校庭——信じられない。みんな、家であんなふうにはぼったした毎日を送っているのだろうか。そういう、わたしもぼっとしている。薬漬け、器械漬け——。

画面に、七十年前のアフリカ大陸の映像が映し出されている。飢えた子どもたちの顔が次々と大写しになる。痩せこけてはいるが、目がきらきら輝いている。肌も荒れていなくて美しい。元気も笑みもない。でも、少なくとも、うつろな目はしていないと、アカツキは思う。流れ落ちる涙はいっこうに止まる気配はなかった。

「壊れている——」

そんな言葉を無意識につぶやいていた。自分の体だという感じがしない。

*

「自爆テロだぜ。すごいやつがいたものだな」

「わたしも信じられなかったけど、シンゲンからの修学旅行生の一人だったらしいの」

「どういうわけで、その子と、新政権につぶされかけている宗教団体とが結びついたんだ」

「詳しいことは知らない。メディアも沈黙している。いずれにせよ、大失態。行政府は新たに情報部を置く計画らしいわ。ほかにも現体制打破をめざすグループが、連帯し始めているという噂だし、今回の自爆テロではセンターの内部にも——」

「とにかく、とぼっちりを受けるのは、いつもおれたち医療関係者だ。体にくくりつけた爆弾の五つや六つで、医療管理センターの中樞がやられて、それでスポット全域の薬と器械の供給が麻痺するなんて、お粗末にもほどがある」

「長官の言葉を借りれば、世界は『平和ぼけ』なんだって。危機管理がおろそかになっていたことは事実。だから、当面の最優先事項は、施設の分散化だというわけ」

休憩時間が終わった。

二人は作業を再開し始めた。

「——とにかく、今回の事件によるニュー・カワサキ全域への影響は甚大だ。ある意味では、新型インフルエンザより質(たち)が悪いかもしれん。スポットの全住民が毎日必要としている薬が切れ、器械が切れる。抑うつで戦意をなくしたYジェネレーション、老いの身に鞭打って幼い子どもたちに襲いかかるZジェネレーション、衝動的に破壊行動に出るXジェネレーション」

「言葉に気をつけて。わたしたち、ちょっと言い過ぎているかも」

「大丈夫さ。おれたちみたいな医療の専門家なしでは、スポットは維持できない。盗聴器を通して聞いている者たちが、そのことをいちばんよく分かっているはずだ——。さて、無駄話は止めて、作業を急ごう。早く家に帰って眠りたい」

「わたしも、ベビーシッターに子どもを預けての生活には、もう耐えられないわ」

*

「シンゲンに空から攻撃を仕掛けるなんて、やりすぎよ」

アカツキの表情は引きつっている。このところ毎日、二十一世紀の歴史に関するコンテンツを大量に見続けている。戦争や紛争やテロの映像が、目の前にちらついてならない。

「センター専用のネットで得た情報によると、数時間以内にソリダリティは、テレビ電話で緊急理事会を招集し、ニュー・カワサキとシンゲンを隔離するかどうか、全スポット間での意見調整を行うそうだ」

かすれた声でユージは言った。

「それって、戦争が始まるということ？」

「そうとも言える。両スポットは事実上、海・陸・空を閉鎖される。シンゲンは新型インフルエンザのエピデミックによって、ニュー・カワサキは薬と器械不足が原因のジェネレーション間の争いと殺戮によって、絶滅の道を突き進むしかない。ソリダリティでは、そんな分析をしている。もちろん、このまま事態が進行すればの話だ。つまりシミュレーションだ。だから、そうならないように、医療監視センターの仲間たちが連日連夜、薬と器械の供給ラインの復旧に全力を挙げている」

「そのシミュレーションが現実になる確率は？ ソリダリティのお好きな人道的措置はどうなっているの？」

「アカツキ、薬を飲もう。ぼくも疲れた」

*

朝。

ユージは階段の踊り場で、立ち止まり、そのままいったん腰を下ろした。夜中に同僚から掛かってきた電話の内容を思い返す。ソリダリティは、ニュー・カワサキとシンゲンを隔離する決議をテレビ電話会議で採択したという。

薬が切れているため、今の気分は最低だ。これでいいのだと思う。このほうが作業がやりやすい。ユージは、液化ガスの入った小型ボンベのコックを少しだけひねった。空気より軽い気体は、やがて二階全体に薄く広がるだろう。二階には、夫婦の部屋、娘の部屋、息子の部屋、そしてバスルームがある。駄目だ。許されないことだ――。

ユージは、階段を駆け上がり、バスルームに入った。胸のポケットから赤いカプセルの入ったプラスチックのケースを取り出す。その二錠を口に放り込み、水道の蛇口にじかに口をつけ、薬剤を飲み下す。気分が高揚してくるのが分かる。

踊り場に駆けもどったユージは、ボンベのコックをきつく閉めた。再度階段を駆け上り、各部屋の窓を開け始めた。大気が放射能によって汚染されているために、窓を開けるのは久しぶりのことだ。

シータの部屋で、ユージは立ち止まった。壁に掛かった鏡に、自分の姿が映っている。直接日の光を浴びているわけではないが、妙に青っぽさが目立つ顔色をしている。太陽光線の反射の中で自分の顔を見るのは何年ぶりだろう。

鏡に映る自分の背後には、仰向けに眠っている息子の顔が見える。朝日を浴びているのに、目を覚まそうともしない。鏡を覗き込むと、シータの額に二つ、顎の下に一つ、黒いあざのようなものがある。

昨夜の娘と息子の喧嘩を思い出す。息子の顔を眺める。その鼻と口元がアカツキそっくりなのに、あらためて気づくと笑みがこぼれた。

開け放たれた窓から入り込む空気がおいしい。

毛布の乱れを直してやろうと、朝日を浴びながら、ユージはゆっくり振り返った。

(了)

奥付

奥付

宇宙法廷審理中

<https://puboo.jp/book/13387>

著者：星野廉著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile>

感想はこちらのコメントへ <https://puboo.jp/book/13387>

ブックログのpapier本棚へ入れる <http://booklog.jp/puboo/book/13387>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<https://puboo.jp/>）運営会社：株式会社
paperboy&co.

宇宙法廷審理中

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
